
死の匂いを嗅いだ日

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の匂いを嗅いだ日

【Nコード】

N8222N

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

生きるか、死ぬか。究極の賭けに出た僕の最後の戦いの記録（執筆記録）です。むしろ日記です。それでも良ければお立ち寄りいただけると嬉しいです。日記みたいなもので文字数はまちまちです。2012年に削除します。

はじめる。

本当はずっと死にたかった。

ただ死ぬ理由がないから、ダラダラ生きてきたただけだ。

この世は腐りかけている。

こんな腐りかけた世の中で、僕の生きる場所なんてない。

現に、正論は通らず、努力は悉く裏切られ、他者には理由もなく悪者にされ、そうやって日々を過ごしてきた。

世界にとって、僕は不穏分子なんだ。

だからこの世に“在る”だけなのに、皆は僕を嫌がるし、僕自身こんなにも苦しい。

絶えず世界が僕の存在を拒むんだ。

そして、僕は生きる理由を探した。

腐汁を拭うのは簡単だけど、元を絶たないといつまでも流れ続ける。

だから僕は小説を書いて、おめでたく幸せに暮らしてる連中に警鐘を鳴らそうと思った。

もしくは、これから前途多難な人生を歩むであろう少年少女たちの、少しでも人生の道しるべとして残そうと考えた。

僕みたいな欠陥品が日々苦しんでいるのを報せるために。そしてこれから生きる子供たちが、少しでも困難に立ち向かえるように。

そして、少しでもこの腐った世界を清めてくれれば、この上なくありがたい。そう思った。

けれど世界は意地悪だ。

そんな僕の思惑も、僅か1%の才能がある人間にチャンスを持つていかれてしまう。

僕には才能なんてないから、99%努力したって、その1%の才能に泣かされてきたんだ。

現状を無視して御目出度い事柄を並べたドラマやアニメを見るたびに、泣いて泣いて、涙が涸れるまで泣いた。僕にとつての“敵”が皆に支持されていることに、何ともいえない悔しさや虚しさが募った。気付けばテレビも映画も嫌いになっていた。

それでも抗い続けて（低収入で自費出版という道もなく）、ただ文学賞に応募しては落選、という日々を過ごしてきた。

けど。

もう、あてのない夢を追うのは疲れた…。

だから、これで最後にしようと思った。

2011年3月、切の新人賞。

これに応募して、賞がとれなかったら、潔く死のう。

所詮、僕の存在はその程度だったのだと受け入れて。

生きるか、死ぬか。

究極の背水の陣で臨む今回の執筆…はたして、どうなるんだろう…？

昨日…いや、正確には一昨日か。早速書きあがった原稿を友人に送った。そして昨日、下読みしてもらった。

かなりの酷評で、僕はまた1から書き直すことにした。大丈夫。まだ時間はある。

問題は山積みだけど、まあなんとかなるだろう。文字通り寝食を削ってでも執筆に臨む。

問題は仕事との両立だ。

僕の仕事は…仕事といってもパートタイマーだけど…朝が早い。朝食も摂らず始発電車に飛び乗って、休む間もなく3時間ぶつ通しで働く。月3回ほど残業有り。昼には帰ってこれるのはありがたいけど、そのときには睡魔と空腹で気が遠くなりそうだ。

それでも、休んでる暇はない。少しでも認めてもらえる作品を書き上げるために、昼から日付が変わるまで書いてやる。時には徹夜続きも覚悟の上だ。

こんどこそ、この努力が実ればいいのだけれど。

そうでない、僕は…。

怖い。

こっぴどく評価されて、1から書き直そうと決めたいけど、怖くて怖くて執筆にかかれない。

せめてプロットだけでもとは思ってたんだけど、ストーリーを思い浮かべようとすると恐怖心が渦巻く。

おかげで三人称にしようか一人称にしようかも決まらない始末…。

分かってる。

努力は裏切られるためにあるんだということ。

現に、忙しい合間を縫って書き上げたオリジナルも一刀両断に却下されたのだ。

次もまた努力を無為にするかもしれない。

それが怖い…。

人間って、自分の物差しでしか物事を計れないんだね。

この前見せた原稿、友達に「のパクリ？」って言われたけど、ハッキリ言ってそんなの知らないよ。

いや、正確には覚えてないだけかもしれないけど…。

とにかく、知ってたら盗作になるから書かないよ。

でも友達からしたら、僕がそれをパクったようにしか見えないんだ。

あと、作中に『押し取り刀』という表現を入れたら、『おっとり』の誤字だと思われるからって却下された。

自分の知らない単語は異質だと言わんばかりに切り捨てる。

こんな風にね、結局は僕が何をやっても気に入らないんだよ。

僕は皆の物差しで計ったら規格外だから。

不良品は捨てられるしかないんだから。

僕が前の会社で正社員をしていたとき、病気を理由に休職することを命じられた。

だけど、僕が休んでる間にリーマンショックが起きて…。

自動車部品製造工場だったその会社は僕が病気であることを理由に、『休職満了』というカモフラージュのもと、体よく僕をリストラした。

ちなみに社内規定では、自己都合退職の場合、3年以上働かないと退職金は出ないことになっていた。僕がリストラされたのは、その3年目に差し掛かる直前のこと。もちろん『休職満了』だから自己都合退職ということになる。

こんな風に、理不尽なリストラが行われ、そんな行いが許される世の中なんだ。

人を廃人にした挙げ句、自分たちはさも悪くないような顔をして、社会に、会社に貢献してきた人間を塵芥のごとく棄てる…それが許され、横行してるのが今の世の中なんだ。

僕はそんな世の中を変えたい。

それにはまず人心に訴えなければならぬ。

だげど、そんなことができる日が来るのだろうか…。

サービス残業をしないというのが、僕の勤め先のルールだ。パートタイム

というか、基本的に残業はするなという方針らしい。

勤務時間は15分単位で数えるらしい。だからタイムカードを押すときは15分、30分、45分…とキリのいい時間に押すようにと言われていた。

なのに…。

僕の仕事は2人1組で行う。その日は相棒が集合場所に遅れたせいでいつもより終わるのが遅くなってしまった。

時計を見ると15分を越え（僕の勤め先は15分に定時となる）、どう考えても中途半端な時間にタイムカードを押すしかなくなってしまった。

だがキリのいい時間に押すようにと言われていた手前、30分まで明日の用意等をして時間を潰し、キリのいい時間に押した。

それが上層部の逆鱗に触れたのだ。

「せっかく定時に帰れるよう仕組みを調べたんだから、終わったらすぐに押す!」

つまり、タイムカードの数字は中途半端でもいいから、残業はするなというのだ。

キリのいい時間に押すようにと言ったその口で！

どっちなんだよ。何が正しいんだよ。僕の頭の中ではそんな言葉が渦巻いていたが、口では別のことを言っていた。

「すみませんでした」

だって、そうじゃないと世間は渡っていけないから。

やっぱり僕はこんな世の中では生きていけない。

要するに世間は僕のことなすこと全てが気に入らないんだ。変えることができないなら、逃げ出すしかない。

死ぬしかない。

今日は非番だ。

久々に新人賞応募用の小説をかなり進められる。

そう思っていた。

なのに…。

パソコンに向かう気力がない。

せめて手書きで進めようと原稿用紙に向かっても、ペン1本持つ気力もない。

いま書いてるこのへたな文章だって、必死の思いで書いているのだ。

何故…？

原因は分かっている。

昨日、上司に言われたことが頭から離れないのだ。あの矛盾と偉そうな態度が、心を滅茶苦茶にするんだ。

いつもそうだ。

僕ばかりが悪者にされる。僕ばかりが悪くて、他の人は笑って許される。

僕よりはるかに手抜きやズルをした人は許されるのに、僕の場合はちよつとしたことでも悪く言われるのだ。

もう心が限界だ。

苦しいよ。分かんないよ。

原稿が書けない。

チクショー！ もう死ぬしかないじゃん！！

丸1日休んでも、心は回復しなかった。

心の不調は体にも表れるのか、職場に着く頃にはフラフラで、先輩たちに手厚い看護をされてしまった。

どうやら渡る世間は鬼ばかりでもないらしい。

しかし横になって休んでる間『こんなところで寝てたら上司に怒られる、早く帰りなさい』と言われたのは気になる。やっぱり僕はいてはいけない人間なんだろうか。疑心暗鬼とは怖いものだ。

明日は上手く演技しなくちゃ。

身も心も疲れて、すでに限界。今日は病院に行こうと思ってる。とりあえず薬さえ貰えればそれでいい。

こんなんでも執筆なんかできるんだろうか。

なんだか、死の匂いが濃くなった気がする。

薬を処方してもらったおかげか、昨日よりは少し楽になった。

だが朝めざめるのが早すぎる。10時に寝て起きたのが1時半とは
どういうことだ。

薬の副作用だろうか…それとも…？

出勤までに時間があったので、滞ってた応募用原稿の執筆にあたっ
た。特に問題なく進んだ。明日には友人に下読みしてもらおう予定。

仕事の方は…まあ、苦手な上司がいなかったこともあるのだが…そ
れなりにこなせた気がする。しかしあくまでも『それなりに』だ。
思い出せば腹が立つし、何より仕事中に虚無感を覚える始末。

でも、まだ死なないぞ。

僕には執筆がある。

そんな簡単にくたばってたまるか。

小学生の頃の話になる。

ある日、僕はペンケース、ソプラノリコーダー、そして紅白帽子を紛失した。

紛失した、というよりは、誰かに盗まれ隠された、と言った方が正しい。

それを当時の担任教諭に話すと、担任は淡々とした声で訊いてきた。

『名前はちゃんと書いたの？』

リコーダー以外は書いてなかったので、正直にそう言った。

すると、担任教諭はこう言ったのだ。

『次からはちゃんと名前書いておきなさい』

つまり、隠した犯人ではなく盗まれた僕が悪いというのだ。

加害者が許されて被害者が責任を問われるって、なんなんだよ。

悔しかった。

悔しくて悔しくて、机に戻って涙が涸れるまで泣いた。

結果、僕は幽霊のようにそれらを探しさ迷い続け、それでも紛失物は見つからなかった。

幼心に、僕は分かっていた。

担任教諭は僕が嫌いだったんだ。

だから被害者である僕を責め、加害者については深く追求しなかった。

どれだけ従順に振る舞っても、結局人は僕を嫌う。

それから、僕の心の歯車は徐々に狂い始め…。

でも、そんな事例は山ほどある。

僕以上に苦しい人なんて、掃いて捨てるほどいる。

だから、僕はそんな世間を変えたい。

僕みたいに被害者とは認められず、泣き寝入りする子供たちを、少しでも助けられるように。

生徒を嫌う教師を撲滅させるために。

昨日、友達に下読みしてもらった。

かなりの酷評で、僕はまたしても鬱々とならざるを得なかった。

でもこんなことで悄気てはいられない。世間を変えるためなら、どんな無茶でもしてやる。

でも…と最近思うのだ。

友人の評価は一般的な読者目線なのか、単に友人の好みで評価されてるのか。

前者なら勿論ありがたいが、問題は後者の方だ。

僕はその友人を満足させるために書いてるんじゃない。世間の間違った秩序・常識を変えるために書いてるんだ。

でも、その部分までダメ出しされたら…。

なんだか最近、その友人の思惑どおりに書いてるような気がしてならない。

もちろん他の友達にも下読みしてもらうつもりだから、問題ないと思うが…。

とにかく、まだ時間はある。

出来る限りのことはやってみよう。

昨日は顔を出せずに申し訳ありませんでした。

理由は昨日…違う、一昨日だ…自殺未遂したからです。

毎回毎回痛烈な酷評をつけ、おまけに『面白くない』と言われたら、文学賞に応募しても無駄なのかな…。

加えて僕は職場での人間関係に疲れた。始終だれかの顔色をうかがって、無理な綱渡りをしていたんだ…。

他にも色々あって、僕は睡眠薬を大量に飲んだ。

でも、死ねなかった。目を覚ましたのは天国でも地獄でもなく、僕のベッドの上だった。

…どうして死ななかったんだろう。

60年もこの世の中が腐っていくのを、ただただ自分の非力を嘆いている、ということなのだろうか…。

それとも、僕にはまだやるべきことがあって、それまで生きよというのか…。

わからない。わからないよ。

とにかく目覚めてしまったのなら仕方がない。しばらくはこれの連載と文学賞に力を入れよう。

…あ、父さんが呼んでる。病院行ってきます。

今日は主治医の先生に家族総出で診察してもらった。

上司に注意されたこと、それが何日も凝っていること、凝って被害妄想のタネになってること。応募原稿がなかなかうまくすすまないこと。大体、そんなことを話した。

先生は『気楽にいこうぜ』と僕を励ましてくれた。本当は気楽になれる精神状態じゃないんだけどね…。

ところで益田ミリ先生の『どうしても嫌いな人 すーちゃんの決心』という著にこんな言葉がある。

『キツく言ったら キツく言われたことだけが残るんだ』

ああ、そのとおりだと思った。

上司の言葉よりも鋭くつり上がった目、歪んだ口、イライラを隠しきれてない声と、人を下に見ているような口調が僕を苦しめていたから。さらに、益田さんはこう重ねている。

『素直に直すなら優しく言えばいい 上に立つ人間は面倒くさがってはいけないんだよ』

それは、僕がずっと言いたくて言えなかったことを如実に表してい

た。

僕もこんな言葉を書ける小説家になりたい。

自殺未遂したことを、遺書メールを送った友人に謝罪したのだが、特に関心を持たれていなかったようだ。

怒られもせず、泣かれもせず、ただ機械的に自殺後のこととか『他のみんなにも謝つとけ』と言われただけだ。

そして、僕が死のうが死なないが構わないとも。

おい、ちょっと待てよ。

自殺未遂した原因の一端は、アンタの超辛口レビューなんだぞ。

そのうえで『誉めてもらいたいなら別の人に読んでもらって』って何なんだよ。お前、何様だよ。

そう言えればよかったのに、言えなかった。

相手を立てないと、僕みたいな人間は生きていくことができないから…。

怖い。

前から人間は怖かったけど、この件でさらに恐怖感が増した。

所詮人間は自分と、自分の気に入った人間だけ幸福になればそれでいい。他人のことは知らない。

そんな腐りきった倫理観を、僕は…変えられるのだろうか…。

昨日、ボツ原稿を書き直して友人に送った。

あの人は厳しいけど、絶対に甘い採点はしないから頼りになる。

まあ、そのせいで自殺未遂とかしちゃったんだけど…。

ところで自殺未遂（大量服薬）してから、僕は1週間、仕事のドクターストップを宣言された。

この機会に少しでも進めていこうと思う。

追記。

今でも連絡取り合ってる人に片っ端からメールしてみた。

『僕が死んだら…少しは泣いてくれる？』

みんなの答えはYESだった。中にはわざわざ電話で返事をくれた人もいた。

嬉しかった。

そうだ。まだしばらくは死ねない。

結果がどうなるかなんて分からないんだから。

民主主義って、本当に素晴らしい制度なのか分からなくなってくる。中学生の頃だった。

合唱コンクールの練習の際、僕が皆より一拍早く歌い出しているといふのだ。

でも僕は譜面どおりに歌ったままで。そう言ったら、『楽譜なんて知らないもん』と開き直られた。

結果、大多数を占めている『一拍遅れて歌う派』に合わせることになった。

こんな風に、民主主義・多数決というのは、間違ったことも肯定してしまう制度なんだ。

僕みたいな少数派・異端児は、泣き寝入りするしかない。

時々ふと思う。

赤信号も皆が渡れば『通行可』になるといつけど、はたしてそれがどんな結果を生むかな。

道路には何十、何百という車が走ってる。

もし…もしそのうちの1台が交通ルールを無視したら…？

少なくとも当人たちの問題ではなくなるだろう。周囲の車も、歩行者も被害を被る。

人間のエゴは怖い。

自分だけ良ければいいという道徳心の無さが怖い。

連絡が途切れるとさすがに不安になってくる。

下読みを頼んでる友達。就活中ということもあって忙しいんだろう。でも『貼付した原稿届いた？』という質問にも答えが返ってこないと不安になる。

もしかして、見捨てられちゃったのかな…？

…そうなくても不思議はないか。

お前のせいで自殺未遂したんだぞ、と間接的に、オブラートに包んで言っちゃったんだもんね。

『もしかして、原稿届いてない？』

メール送信。

…やっぱり返事が来ない。

こうなったら電話で…！

プルルルル…。

ガチャッ。

切られた。

ああ、やっぱり見捨てられたのか…。

ショックで呆然としてみると、電話がかかってきた。

さっきの友達からだ。

『ごめん！ いま電話に出られない所にいるから』

なんだ…そうだったんだ…。

見捨てられたのかと思っただけ、そうじゃなかったんだ…。

その後、夜10時過ぎに友達からメールが届いた。

『まだ帰れないから電話での内容メールして。後で見るから』

僕は単に見捨てられたのかと不安になったこと、そうじゃなかったから安心したこと、遅くまで帰れないことの労いの言葉を送った。

やっぱり友達が減るのは淋しくなる。

でもいつか…多分、近いうちにそうなるんだろう。

それとも僕の方から先に『サヨナラ』を言うことになるんだろうか…？

仕事を休んでそろそろ1週間。

働いてるときは『朝は〜辛い〜昼は眠い〜夜は重い〜ラララララ
〜』だったのが、こうも時間があると退屈になってくる。という
か、前の職場の話じゃないが、また休暇を理由に退職を言い渡され
てもまた困る。

とにかく、そろそろ暇になってきた。はやく職場復帰したい。

執筆は滞りなく進んでいる。というよりは、ダメ出ししてもらって
いる友人が忙しいせいで手直しだけが進んでる状態だ。まだ本格的
な推敲まで進んでいない。

まあ、まだ〆切までは5ヶ月あるから大丈夫だと思っけど…。

1週間の休暇のせいでダレてきたし、そろそろ気合い入れないと！

明日から職場復帰が決まった。

クビにならなくて良かった…（ほっ）。

すぐにでも来てほしいと言われ、体の心配もしてくれた。ちょっと嬉しい…。

だけど不安は残る。

あくまで肝臓と胃を休ませただけだから、精神的なケアはしていない。

また自殺未遂したくらい辛いことに遭遇したらどうしよう…。

薬は親が管理してるからオーバードーズすることはないと思うけど…
…職場柄、洗剤・石鹸はあちこちにある。

また自殺念慮が起きないことを祈る。

今日から仕事復帰。小説との両立がんばるぞ〜！

と言いたいけど…。

下読みのレビューがまだ来ない（泣）。

僕としてはそろそろ本腰を入れたい時期に来てるんだけど…。

まあ友達も忙しいしね。

でもなんだか一人相撲って感じだ…。

こんなんでうまくいくのかなあ…。

小説のことがあるから、入院を断って1週間の自宅療養にしてもらったのに…。

…あーダメダメ！

ネガティブに考えてたらネガティブなモノしか書けないよ！

応募はエンターテイメント性の強いストーリーって書いてあるんだし。

とにかく、もりもり働くぞ〜！

昨日、どうにか仕事にはついていった。

けどさすがに疲れた…（汗）。

一昨日の話になるけど、ようやくレビューが来た。

特に問題もなく、かといって良い点もなく…要するに可もなく不可もない採点内容だった。

それと同時に、もう下読みやめると言われた。

なんで！？ やっぱ忙しいからかなあ…。

それとも書いてる話がつまらないから…？

下読みは別の人に頼んでくれと一言。

あてはあるから、その友人に頼もうかな…。

問題はパソコンのメールをその友人が使えるかだ。

でないと直接あってプリントしたのを誰かに見てもらうしかない。
ていうか、それじゃ×切に間に合わないし！

まあ、その時はその時で考えよう。

仕事といい、なんだかちよつと前途多難…。

今日は非番だ。

この機会に書き進めるぞ〜！ と気合いを入れたものの…、

この2日間の仕事疲れで昼まで爆睡してました。

意味ないじゃん（泣）。

これなら昨日夜更かして進めればよかったよとつくづく思っけど、
今さら思っても仕方ない。

エネルギーもチャージしたし、これから気合い入れて頑張ろう！

小説書きの時間は量ではなく質だ（と、無理矢理思い込むことにす
る）！

ところで最近、卒アルを見ることが気分転換になってます。

なんか物書き目指し始めてた頃を思い出すよ。当時の僕は10歳…
（汗）。

いや、実際見てるのは中学生時代の卒アルだけだね？

気合い入れて頑張った結果、昨日ようやく手直しが完了しました（パチパチ 拍手）。

あとは誤字脱字なんかの自己チェックと、友達に下読みしてもらうだけ。

とはいえ、またまた膨大な手直しを指摘されたらどうしよう…。

その時はその時で考えればいいか。まだ時間はある。

問題はその友人、パソコンのメール使えるかなあ…？

パソコンのメールに貼付して、それを読んでもらうのが最近身に付いた小技だった。

もしダメだったら他の友人に頼めばいいけど…全員ダメだったら本当にプリントアウトして直接あつて見てもらうしかない。

いやいや、さすがにそれだと時間とれないから。

ていうか、その時に手直し指摘されても書き直す時間ないから！

とにかく、死なないようにがんばるぞ…（仕事疲れて脱力）。

昨日のはなし。

なんか直すところがいっぱいあった（汗）！！

まずは人称。

下読みしてくれた友達のアドバイスをもとに3人称から1人称に直したのだけど…、

なんかもんのすごく直してないところがあったの（泣）。

それに関連して、呼び方。

普通、3人称ってキャラクター名とか呼び捨てじゃないですか。

しかし作品の都合上『様』とか『殿』とか『さん』を付けなきゃいけないところがいっぱいあって…、

で、直してないところがいっぱいあった（号泣）。

そんなこんなで直しに直してたら深夜2時…。

明日も仕事なのにいいいい（朝4時起き）！！

こりゃ友達に下読みしてもらつまで時間かかるな…。

卑怯なのは百も承知で、某出版物の批判をさせてください。

その作品は女子禁制の試験を女の子も受けることができるというのが、主人公ひとりだけが女の子で受けて見事合格した。

でも、そんなことって本当にあるのか？

まず第一に、女の子が“ひとりだけ”というのは不自然だろ。

僕の母校（高校）は僕の代から共学化することによって、女子も男子も大勢受けに来た。

第二に、女子ひとりだけが合格しましたって鼻屑じゃね？

高校受験の時、幸い僕は合格したけど、不合格で泣いて帰った男子も女子もいたよ。

だから、何人もの女の子が受験して、何人が努力したけど落ちた、つてのが自然だと思う。

まあ、読者は主人公と自分を重ねて読むものらしいし、ちやほやさ
れたい願望を満たしてはいるんだろうけどさ。

ちやほやされたい気持ちは分かるけど、現実を見なくちゃ辛いこと

にぶち当たったとき苦悩するだけだよ。

乗り越えられないよ？

僕は人を嫌いになれない。

偽善的なのは百も千も承知だ。

それでも、どうしても無理なんだ。

だって、それは全部自分に跳ね返ってくるから…。

僕が人を嫌いになるとすると、まるで誰かが僕に囁くようにして脳内にある思考がよぎる。

“お前も人に嫌われてんだよ”

たぶん、僕がその人を嫌いになると同じくらい…いや、もしかしたらそれ以上に…。

それが今まで人に嫌われ、生きてきた人間の運命さだめなんだ。

人に嫌われる苦痛を知っているから、どうしても本能がそれを拒む。

体が鉛を飲んだように重い。

頭もクラクラするし、なんだか手足もしびれてきた。

それとともに神経質になったようだ。

人とすれ違うだけで『邪魔なんだよ』『テメエなんか消えちまえ』

『お前はいい方がいい人間なんだよ』と言われているような被害妄想にとりつかれる。

加えて電車で大声で喋る人、蝙蝠傘を肩に担いで歩いている人、細い道を横三列になって大声で話ながらゆっくり歩いている人…そんな非常識な態度が許せなくなってる。

なんだかむしゃくしゃして、とてもじゃないが執筆できる状況になり。

パソコンに向かうだけで体の重みが増すんだ。

こんなんでも本当に大丈夫なんだろうか。

もしダメだったら、僕は…。

某占いサイトで『あなたはどれくらいウザがられてる?』というのをやってみた。

いろんな人(パート先)でやってみたら、4人中4人とも“あなたのことをウザいと思っています”って出た(涙)。

僕:なんにもしてないのになあ…。

…違った。

なんにも悪いことした覚えないんだけどなあ…。

もしかして…、

存在していること自体ウザがられてるのかな。

ちよっと凹むなあ…。

でも、そんなのって間違ってるよね?

その人が存在してること自体いやがるってことは、その人に殺意を抱いているのと同じくらい悪質(な、ハズ!)。

いや、むしろ自分に非がないように思ってるだけ、余計に陰険だよ。

これじゃあ命の大切さも平和主義もその意味をなくすんじゃないかな。

と、考えてみる。

そんな世界を…僕は変えたい。

人に嫌われるのはもう慣れた。

けど…、

人に嫌われるということは、世間からも嫌われるということだ。

人間が、嫌いな人を無視したりいじめたりするように。

世間に嫌われている人は、生きていくだけで空気のようなものに執拗に攻撃される。

正論に基づくと主張が通らないこと。

必死の努力が報われないこと。

アラを探られてはそれを笑いのネタにされること。

癪に障り癪に障るといふ理由だけで文句を言われること。

そんな何気ないことで深く心を抉られる。

そんな人間は掃いて捨てるほどいるだろう。

きつと、世間を敵にまわした僕も、世間に嫌われているのかもしれない

ない…。

『命を捨てるくらいなら、私に下さい!』

よくそう言う人がいる。

あげられるもんならあげたいよ。

そうしたら、その人の死も…僕の死も、無駄にならないから…。

他人の命の重みを勝手に量ることは許せない。応募作にもそう書いた。

でも自分の命に関してはそれほどでもないんだ。

僕が命をかけて世間を変えようと思ってるせいかもしれない。

命をかけてやり遂げたいことのある人。

命をかけて守りたいもののある人。

そんな人たちの決意を、誇りを、簡単に否定したくないんだ。

12話完結シリーズ『新人はハンサムガール』に出てくる神野優雅の過去は、ほとんど実体験に基づいて書いたものだ。

社内でのいじめにあったことも、それがもつて対人恐怖症になったことも、そのせいで仕事もロクにこなせず解雇されたことも。

仲良くしてくれた先輩に裏切られたことも。

それがもつて変な火が付き、会社にとつても社員にとつても、もう手放せない！ という人間になってやろうと決意したことも。

だけど最近、その決意が揺るぎつつあるのだ。

いや…揺るぎつつあるというよりは、諦めるしかないほど状況が悪化していると言った方が正しい。

どうしても社員の方々に避けられているような気がしてならない。

僕はもう一度、同じ過ちを繰り返そうとしているのだろうか…そんな漠然とした不安に襲われる。

…いや、

死の臭いを嗅いだあの日から、避け始めたのは僕の方なのかもしれ

ない。

もともと良く思われていなかったことを受け入れてしまっ
て、自分の方から距離をとっていたのかもしれない。

なんにせよ、人に嫌われるにはもう慣れた。

今さらこんなことで、心を動かされたりしない。

毎日の超早起きと職場における過度のストレスから、僕の午前中は端から見てもフラフラになってしまった。

だからパートから帰ったら、すぐさま仮眠をとることにしている。本当は執筆にのぞみたいところだけど、手足は痺れ、頭はクラクラし、とてもじゃないがディスプレイを見ることもキーボードを押すこともできないのだ。

とはいえ、仮眠とは名ばかりのかなりの時間を昼寝に費やしているのは事実だ。ただし、眠りは浅く入眠にも相当な時間を必要とし、中途覚醒：途中で目が覚めることもしばしばある。

酷いときには頭を鈍器で絶え間なく殴られているような頭痛や、心臓をわしづかみされているような胸の痛みから、一日中ベッドに横になっていることさえある。

しかも最近薬の耐性ができたのか、病院で処方されている睡眠薬も効かなくなってきた。

そのことを母に話したら、しれっとした顔でこう返された。

『昼間あれだけ寝てるからだよ』

…なんだよ、それ…！

母は僕のストレスの強さも、仮眠時の入眠困難や中途覚醒のことも知らない。だから仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないけど…。

もう少し優しい言葉をくれてもよかったんじゃないの？

家族でさえ、僕を理解してはくれない。

死は確実に早足で僕に近づいてきている。

旧約聖書にカインとアベルという兄弟が出てくる。

その昔、神ヤハウエにカインは作物を、アベルは肉をお供えした。

しかしヤハウエは肉を選び、カインの供物を無視した。

このことに嫉妬したカインはアベルを殺し、それを知ったヤハウエはカインをその地から追放したという。

この場合、決定的に悪いのは誰なのだろうか。

僕は、全てはヤハウエのせいだと思っている。

神様相手に悪いの何だのって、随分罰当たりなことを言うと思うが、彼がカインの供物を無視しなければ、兄は弟を殺したりしなかつたはずだ。

それでもヤハウエは“神”という権力のもと、気に入りの人間の訴えを聞き、気に入らない人間を殺しもせずそれ以上の苦痛を与え、罰した。

そんな権力者が上にいるということに腹が立つ。

夢を、見た。

誰かが僕の応募原稿を見て、『読んでいて疲れる』と言いつつ放った夢だ。

それが正夢なのか、逆夢なのかは、分からない。

けれどもなんとなく、今回は正夢なのじゃないかと、漠然とした不安に襲われる。

もともと、逆夢しか見ない僕だ。

いい夢や幸せな夢はことごとく現実における悪夢へと変わり、災難として僕に降り注いできた。

だから今回見た夢も逆夢で、もしかしたら予選通過くらいするかもしれないと淡い期待を抱いてもいいのかもしれない。

けれども僕の、これまでの期待をことごとく裏切られた人生が、そんなささやかな願いを抱かせないのだ。

だから、今回は正夢で、僕の死ぬしかない運命をあらためて知らしめるものではないかと思ったりする。

雨が降っていた。

とはいっても、それは少しの間の小雨の話。

仕事で洗濯当番になった僕は、雨のやみ間、マンションの洗濯物の干し状況、路上を行き交う人々の傘の差し具合を見て、とりあえず洗濯物を外に干すことにした。

というか、少しでも風に当たって乾かしておかないと明日の仕事に支障が出る量だったのだ。

ところが僕が洗濯物を干していると、パートのオバチャンが『中に干せば？』『ずっといるわけじゃないんだから』などと口煩く言ってきたのだ。

(…このクソババア…)

でも分かっている。

つまるところ、人間誰しも僕のやることなすこと全て気に入らないのだ。

だから自分の意見を絶対だと信じ、とやかく僕に言ってくる。

僕はその程度の人間でしかないから…。

たとえ殺されてもとやかく言える立場じゃないから…。

殺されて当たり前の人間だから…。

死ぬしかない人間だから。

身体が重くて沈んでいきそうだ…。

いや、決して体重が増えたとかそういう意味ではなく（笑）。

応募原稿の自己手直しがほぼ完成したせいか、

気が抜けてしまって、一日中ベッドでぼーっとしてるか眠っている気がする。

とりあえず11月に入ったら、また友達に下読みしてもらおう予定。

ダメ出しされたら、また気合い入るかな…？

でもまたイチから修正するハメになったらドウシヨウ…。

ダルい。ダルい。

ケータイを持つのさえかつたるい。

最近多忙とストレスで神経がささくれてきたのか、バラードを聴くと心底ホツとする。

それも両思いを歌ったラブバラードではなく、失恋ソングやそういつた現実味のあるものだ。

だからパート先で何か面白くないことがあつたら、部屋を真っ暗にして布団かぶつてバラードを聴いている。

真っ暗で、隣の部屋から聞こえてくるテレビの音ほか雑音が入らなくて、たたみ一畳分ほどしかない狭い空間。それが、ここ最近の僕のシエルターだった。

そして僕は今、そのシエルターの中でこれを書いている…。

スケープゴートを生み出すには、もう一匹のスケープゴートが必要になる。

例えば、弟のアベルを殺して追放された兄カインのように、またはイエスを裏切ってその罪悪感から自殺したユダのように…。

それが僕の持論だ。

負けてくれる相手がいなければ勝利はあり得ない。愚者がいなければ賢者が光らない。

負極にいる“誰か”がいなければ、決してこの世の中で生きることができない。

そう思ってしまうのは…きっと、僕が“必要ない人間”として扱われてきたせいだろう。

必要ないから、自然と負極に入り込むことになる。主張は無視され、己の正義は悪と見なされ、そうやって僕は生きてきた。

だから、自然と“もう一匹のスケープゴート”に共感してしまうのかも知れない。

とうとう昨日は一睡もできなかった。

処方されている睡眠薬の奇跡が及ばなくなったらしい。

原因は分かってる。

パート先での対人ストレスから眠りが浅くなっていたのだ。

先輩のN氏。

彼女の同僚のミスに『誰も他人のことキツク言えないんだよ』と僕にポツリと言ってきた。

…なにがキツク言えないものか…。

“誰も他人のことキツク言えない”…それがたつた今、自分もその人のことをキツク言ったのだとどうして分からない？

人間はすべからず利己的だ。

他人に辛く、自分に甘い。

それは僕たちにとって、とても不都合なことなんだ。

僕はこの世の中を変えたい。

このまま世界が腐っていくのを黙って見ているつもりはない。

なんで、人の悪口を言う人がいるんだろう。

なんで、人の陰口を叩く人がいるんだろう。

なんで、愚痴ばかりこぼす人がいるんだろう。

なんで、怒りを抑えきれない人がいるんだろう。

たとえ気に入らなくても、口に出さす必要のないことが多いのに。

刃は身を決るけど、言葉は心を決る。

武力で争うような殺伐とした時代は終わっても、人が人を憎むその心根は変わらない。

だから日本人は武器で争うようなことはなくても、平気な顔をして言葉で心を決る。

もしかしたら、またあの殺伐とした時代を繰り返すのかもしれない
…そんな予感がする。

痛いよ。

痛い。

怒りや憎しみなんて、聞きたくないのに。

勸善懲悪というのはどうも解せない。

とつか、正義と悪の基準って何？

自分に都合がよければ善で、自分に都合が悪ければ悪なの？

よく、小説なんかで『大切なものを守るための殺生なら罪にはならない』なんていうけど、それってとつても利己的だよな。

だってさ、相手にしてみれば相手を殺すことが自分たちの正義なのかもしれないんだよ？ 赤穂浪士みたいに。

いかなる理由にせよ、相手を殺せばその人はれっきとした殺人鬼なんだよ。

そんなものが正義を標榜するなんて認められない。

認めない。

某総合ディスカウントストアのトイレに行ったら、清掃中だった。

仕方なく引き返したところで、男性とすれ違った。

男性はブツブツ言っていた。

「『しばらくお待ちください』って看板出てるけど…まあいいだろ」

そうやって男性は何食わぬ顔で清掃中のトイレに入っていた。

…なんてデリカシーのない…。

僕は思わずため息をついた。

いいわけあるかよ。

清掃員はマジメに仕事してんだぞ。

せっかく綺麗にしたばかりのトイレを汚されて、腹が立たないと思うのかよ。

せめて他の階のトイレを使うとか、それくらいの気遣いはしろよ…！

けど、所詮人間なんてこんなもの。

どうしようもないくらい利己的で、他人の迷惑を顧みない。だから自分の行いが他人に不快感を与えていることにも気付かない。

これだから、人間は嫌いなんだ。

強きを助け、弱きをくじく。

長いものにはぐるぐる巻き。

たとえそれが人間という生き物の本性なのだとしても、上にいる立場の人間は面倒くさがってはいけない。

権とは弱者をいたぶるためにあるのではなく、下にいる者を守るためにあるからだ。

だからいくら礼を求めても、下の者は頭を下げてくれる。いくら語気強く注意しても素直に聞いてくれる。頭に足をのせてムリヤリ下げさせるようなマネをしても、部下は許してくれるんだ。

仁の心をもって接しなければ、部下から反感を買って、昔ならとつくに首を落とされてるよ。

違う？

祖父の通夜の時だった。

当時まだ12歳だった僕は、布団に身をくるんで従兄弟たちの会話を聞いていた。

僕と従兄弟たちとは歳が3つから6つ上に離れている。

一人っ子で、甘えたい盛りだった僕に比べ、彼らはもうすでに遊びたい年頃だった。

だからといってはなんだけど、肉親なのになんとなく距離を置かれている気がした。

それが確信に変わったのが祖父の通夜の時だった。

「私さー妹って嫌だな。なんか生意気なんだもん」

そのときざした感情の名は、覚えていない。

ただ、ショックを受けたのは事実だ。

つまり僕は従兄弟たちにとって“妹”以下の存在。

いや、もし仮に下の兄弟のように見えてくれているのだとしても、生

意気で可愛くない奴として見られている。

歳の近い肉親にさえ拒絶されているとハッキリ悟ったのは、そのときだった。

…そう。歳の近い肉親でさえ、拒絶し拒絶されることはあるんだ。

世代も性別も違う赤の他人同士が分かり合えるとは到底思えない。

ましてや文化や国境や言語を越えた付き合いがうまくいくなんて信じられない。

そつでなければ、これまでの人類の歴史の中で、争い事など起こるはずがなかった。

人が人を平気で傷つける世の中になんて、なるはずがなかったんだ。

そろそろ応募原稿を仕上げなくちゃいけない。明日には友達に下読みを頼もうと思う。

途中でかなりのオーバードーズをしたわりには、我ながらよく進められた。仕事場でのストレスがなくなったわけじゃないけど。

あのときの注意：自殺未遂までするきっかけになったわけだから、恨んでないと言えは嘘になる。

ベテランの先輩は深く追及せず、年若い後輩には厳しくする。それって…弱いものいじめじゃん？

弱いものいじめじゃないなら、パワハラってやつだね。

なんにせよ、人間がここまで愚劣極まりない生き物だとは思わなかった。

よく『殴られる方は痛いだろうが、殴る方も痛いんだ』などと開き直る人もいるけど、殴られる痛さと殴る痛さじゃ質が違う。

殴る痛さはスッキリする痛みで、殴られる痛さはいつまでもジクジク疼くような痛みだもん。

スッキリする痛みといつまでも残る痛みじゃ、どっちがダメージでかいかわかりきつたことだろ？

前者は3日で忘れられるけど、後者は3年は忘れられないよ。断言する。

てゆーか、なにそれ。

管理教育ってやつじゃん。

あの『教師が生徒に手をあげたら、学校を辞めなければいけない。けど自分はお前のためにそうしてやってるんだ』って開き直るやつ。

なんていうか：自分が学生時代に受けた体罰なんかのダメージが、抜けきらないんだろうな…。

そしてそのまま教師になったり上司になったりして、今じゃ弱者を虐げる。あるいは反動からモンスターペアレントなんかになって、

学校に反発する。

そして、そうやって生きてきた子供たちや若者が大人になったとき、弱いものいじめを再現する。

このままじゃ事態は悪化するばかりだ。

まずは人心を変えなければいけない。

でも、どうしたらいいんだろう。

2010・11・02・

もう心がボロボロだ…。

他人はおろか…友人も…親でさえも許せない…！

人間なんか嫌いだ。

文化の日ということで文化・芸能関係のお話を少し…。

某有名俳優が某文学賞で大賞を受賞、その上で執筆活動を理由に所属事務所を退社、賞金を辞退したのはご存知の通りだろう。

本人は『芸名ではなく別名で応募したので純粹に作品が評価されて嬉しい』と語っているが、概ね原稿応募の際には略歴を添付する（これを忘れると下読みされる前に落選することが一般的）。まさかその略歴を見ないで作品が評価されたとは思えない…。たぶん、下読み屋さんのご本人だと気付いてるよ。

それはともかくとして…今をときめく人気俳優が受賞するなんて、なんだか寂しさを感じるな…。

俳優として名を馳せて、今をときめく人気歌手の奥さんがいて。人生順風満帆なはずなのに、いったい何が気に入らないの？

応募総数1000人を越える中には、僕みたいにアテのない夢を追うのに疲れはてて、最後の賭けに出た人も少なからずいたんじゃないかなあ…。

そんな人にとってみれば、欲しいものは何もかも手に入れといて、拳げ句に自分の夢さえも奪っていった彼は、泣くに泣けない最低の受賞者だよ。

そんな中で所属事務所を退社、賞金も辞退だなんて…それ、泣く泣く落選した人への侮辱でしかないじゃないか。

でも、世間に愛されるというのはそういうことだ。

気に入られているから、最高の待遇を約束される。

逆に世間から嫌われている人間は努力を裏切られ、才能を認められず、手に入れられるものなんて何一つなく、野に埋もれながら一人静かに死を待つしかない。

そんな社会的成功の格差をまざまざと見せつけられた、文化の日。

最近なんだか誰とも噛み合わない…。

勤め先の上司。

僕が確定申告について相談しようとしたら嫌そうな顔をした。というか、僕がその場にいた時点ですでに目が剣呑だった。

忙しかったのはよくわかる。

だからって、部下を邪険にすることはないだろう。

僕はタイミングをはかって相談に行ったんだ。

或いは、父親。

リビングで日本シリーズを見ながら話しかけていたが、そのうち返事が曖昧になり、話しかけられるのも嫌というような声になった。

自分はマンガ読みながらテレビ見てるくせに…！

少しは子供の話しに乗ってくれてもいいだろうと思いつつも、そのイライラした雰囲気は怖くてリビングから逃げ出した。

こんなことが誰とでも多々あったんだ。

もう世間は僕を見棄てたのか…。

ところで昨日、ドラッグストアで睡眠薬を買った。

死の足音はすぐそこまで迫っている。

この頃うんざりしない日が無い気がする。

昨日も調子が悪かった。

ほとんど心身症発症も同然で職場に行ったら、ロッカールームが一杯だった。

仕方ないので僕は椅子に座って、傍らに積み重ねてある段ボール箱にもたれ掛かって目を閉じて待っていた。

しばらくすると、空いたよ、という声。

だが体調不良でぐったりしていた僕はなかなか動き出すことができなかった。

そんな僕に投げ掛けられた一言…。

「寝ちゃった？ おねむ？」

…その瞬間、僕の堪忍袋の緒がまとめてブチブチッと切れるのを感じた。

人の不調を勝手に寝不足で片付けるなよ…！

心がモヤモヤして、ざわざわしてキリキリして。これでは仕事にならないと思った僕は痛みでそれを紛らすことにした。

アームカットをしたのだ。

それも一本ではない。腕全体に、10ヶ所くらい。

なのに、支給品の半袖の作業着を着ているにもかかわらず、10人近くいる従業員の誰もがそれに気づくことはなかった。

…分かっていたつもりだった。

人間というのは自分の物差しでしか物事を計れないし、計ろうともしないことを。

他人に興味などなく、自分と、自分のお気に入りである一握りの人間さえよければよく、その他の人間などどうだっていい、むしろ嫌いな人間なら死ねとさえ思う…そんな生き物であることを。

だったけど、まさかここまで人間が利己的で愚劣な存在だとは思ってもみなかった。

自分もそんな“人間”の一員なんだ…そう思うと無性に腹がたつ。

しばらくは仕事の遅い人とタッグを組むことになった。

一階につき2ヶ所あるトイレ（男子・女子・身障者まとめて）をそれぞれやってゆき、最後最上階にある1ヶ所だけのトイレを2人でやるつというのだ。

ただしそれは表向きで、相棒は前述のとおり仕事が遅い。よって最上階のトイレは僕ひとりで掃除しているといつてよかった。

べつに遅いのは構わない。サービス業ということもあって、できる限りお客様が来店する前には片付けておきたいが、それくらい僕ひとりでなんとかなる。

問題は、相棒が開店を告げるアナウンスが流れる前に集合場所に来たことがないということなんだよなあ…。

なにそれ。

それって完全に僕に仕事押し付けてる？

早くしようと努力してないのなら失礼だし、早くしようと試行錯誤しないのならただの阿呆だよ。

そのくらい我慢できるけど…さすがに小さいことでもそれが積み重

なると、辛いんだよなあ…。

水島ヒロとポプラ社との出来レース（と僕は思っている）以来、なんとなく執筆が滞ってしまった。

自分の身にそれが降りかからないとは限らないからだ。

どんなに努力してもその頑張りが報われることはないことくらい、高校受験に失敗している僕はとつくに知っている。

そうでなくても一番の座はひとつしかないんだ。ライバルも頑張ってる以上、絶対に頑張ればうまくいく、待てば海路の日和ありなんてことは絶対にあり得ない。

ぐだぐだ時間だけが過ぎていく。

睡眠薬のストックもかなり増えた。

僕の命は…あと1年、もつだろうか…。

「そちらの方は？」

仕事から帰る際、そう警備員さんに質問された。

勤務先が大規模な総合ディスカウンドストアということもあり、万引き対策として退社の際には手荷物検査がある。

しかし今日はテナントの入社式があつたらしく従業員用出入口は混雑しており、結果として僕はどんどん入ってくる新入社員さんの入店手続きが済むまで、手荷物検査を足止めされることになった。

警備員さんは何度か顔を合わせたことのある人だった。

にも関わらず、テナントの新入社員と思われたのか「そちらの方は？」…すなわち「何の用ですか？」と質問されたのだ。

…シヨックを受けなかったと言つたら嘘になる。なにしろ何度も顔を合わせているというのに、覚えてもらっていなかったのだ。

しかししょうがない。これだけ大規模な店ともなると、従業員の数は計り知れない。誰が誰だか分からなくても当然と言えば当然だし、ましてや清掃のパートタイマーの顔まで覚えているはずがないのだ。

理屈では分かっているけど、気分が落ち込むのは止められなかった。

所詮人間は他人に無関心な生き物なのだという現実を、まざまざと
見せつけられたから。

気に入った相手にしか興味はない。

それが、人間。

僕には異性との交際経験というものがない。

異性に好かれるなんてことはあり得ないし、それ以前に“人”としてさえも見てもらえないのだ。

それはべつに構わない。恋愛は自由意思でするものだから。

ただ、嫌いな人間に好かれるなんてイヤだろうから、僕から好意を抱くことはしないでいる。

それでも過去に2度、お一人様を脱出できそうな機会はあった。

向こうから『好きだ』と言ってきてくれたのだ。

けれど…それは嘘だった。

詳しくは書かないが、どちらも出会い系サイトのサクラみたいなもの、甘い言葉で僕の金銭を奪おうとしていたのだ。

2度も騙された僕は…一生ひとりで生きていく覚悟を決めた。

誰かが僕を好きになってくれるなんて絶対にあり得ないから。

だから…もう、ひとりぼっちを脱出できるかも、と期待するのはや

めよう。そう決意した。

それに…。

僕にはやらなくちゃいけないことがあるんだ。こんなところで立ち止まるわけにはいかない。

ポプラ社から『KAGEROU』（たしか、こんなタイトルだったと思う）が出版されたら、絶対に買う人が続出するんだろうなあ。

出来レースだなんだ言ってた人も、結局は買って読んで非難ごうごうってところなんだろう。

で、その爆発的な売れ行きから映像化されて、さらにそれが善きにしる悪きにしる大反響を呼ぶ…。

まるで誰かが書き上げたサクセスストーリーのシナリオみたいな話だ。

某マンガで、敵役が『この世は力と金のある奴が勝利するんだ。お前らみたいに情だのなんだの言ってる奴等は所詮負け犬でしかないのだ！』と言っていた。

もちろん、主人公陣は策を巡らし、見事その論を撃破していたが…でも、今回の件で確信した。

この世は力と金のある奴が勝利するんだ。

たとえどれほど叩かれようと、出版物が売れたら社会的な成功と見なされる。映像化されて人気を博せば、懐に入ってくる額は言うま

でもなくハンパない。

まさに力と金の勝利した事例だ。

現に、これまで努力して書き上げた1000通を超える応募原稿は、出版社の利益第一にゴミ同然に棄てられている。

努力なんかしても、そんなもの力と金の前では全くもって無意味だということだ。

悔しいけど、そのとおりなんだ。

この世は力と金のある奴が勝利する。

山本周五郎の作品に『さぶ』というものがあるのは知ってのとおりだろう。

その中の登場人物である三郎の友人・栄二は、無実の罪を着せられ、寄せ場送りになる。

その真犯人は物語のラストで明らかにされる。

当初、置き手紙の内容から栄二は三郎が自分をこのような目に陥れた犯人ではないかと疑い、憎んだが、実際は英二を慕っていた女（ラストの時点では妻）が犯人だった。彼女は2人の友情が壊れることに罪悪感を抱き、カミングアウトしたのだ。

しかし、栄二は彼女を許した。寄せ場送りにされたお陰で、自分は成長させてもらったと言って。

…そう、友情と愛情の差はここにある。

長い付き合いでも友人がしたことは許せないが、愛する人がしたことなら簡単に許してしまう。

相手をどこまで受け止められるか、ここに絶対の格差があるのだ。

僕は恋というものを覚える前に、その事実を意識の奥底に刷り込ま

れた。

だから無意識のうちに、友人が離れてひとりぼっちになる未来を予感していたのかもしれない。

彼等、彼女等は僕と違って、いくらでも輝かしい未来が待っている。人一倍努力し、頑張りさえすれば、欲しいものや人並みの幸せは必ず手に入る。

愛する誰かと結婚し、幸せな家庭を築くことも出来るのだ。

そうなったら、僕のような旧友にもはや用はない。

おいてけぼりになる未来を…僕はずっと見てきたんだ。

自殺未遂した日の翌朝のことだったが、運悪く目覚めてしまった僕は、1日会社を休む旨を勤務先に伝えるハメになった。

僕はぼんやりする意識と力の入らない指でケータイから連絡を入れた。が、…誰も電話に出ない。

当たり前と言えば当たり前だが、朝6時から仕事開始なのでその前に連絡を入れなければいけない。しかし、当然そんな早い時間に上司は出勤していない。

ちゃんとした手順があることはあるのだが、意識が朦朧として呂律も回らない僕に複雑な手順を踏むのは不可能だった。

そこで苦肉の策として、唯一電話番号を教えてもらっていた上司のケータイに直接連絡を入れたのだ。

『俺に言われても…』と言われたところまでは覚えている。とりあえず誰にも繋がらないこと、今日は休むということだけ伝えて、僕の意識はとうとう無くなってしまった…。

この行為が反則だと伝えられたのは、つい昨日の朝礼の時だ。

よほど迷惑をかけてしまったのか、同僚や先輩の皆さんは僕が規則違反をしてしまったことを知っていた。急遽休む時の連絡方法

が伝えられる間、皆の探るような目が怖くて僕はずっと俯いていた。

…人間って、やっぱりみんなそうなんだな。

人のアラや失敗や情けないところを探するのが大好きで、それで自分の立場を守って、拳げ句の果てには人と共有して笑いのネタにして、嘲って、楽しんでるんだ…。

だって、生まれてこのかた、そうじゃなかった例ためしがない…。

某マンガの話になるが、あまりにも女らしくない女性が登場した。

主人公は彼女等に『女性はもっと可愛らしく！』と豪語したのだが、リーダー格の女性はこう言い返した。

「女は所詮外見よ！ だから私は女を捨てこうなったんじゃい！」

主人公は『けど、どんなに男らしく振る舞っても男には勝てないよ』と言っていたが、後に自己嫌悪に陥る。僕は確かにあの人とは結婚できない、と。その女性があまりにも醜女だったので。

醜女はどのように生きるしかないんだろう…。

女らしく振る舞っても気持ち悪がられ、男勝りに振る舞っても男性には勝てない。

選ぶべき道は幾つもあるのに、彼女等はそのどちらにも進むことが出来ないのだ。

そんな彼女に『女性は女性らしく。男勝りに振る舞っても男性には勝てないよ。僕は貴女のような醜女とは結婚できないけどね』というのは、あまりにも酷な話だろう。

よく『人間は外見ではなく中身』などと言うが、そんなの嘘だ。

だって、まず外見を見てもらわないことには中身など興味を持って
くれないから。

そんなセリフは、己の外見にコンプレックスを持った人間のささや
かな慰めにしかすぎない。

口先だけなら何とでも言えるよ…。

人間ってやつは本当に偽善的だ。

人に悪く言われるのは慣れている。

けど、こればかりはなあ…。

自殺未遂する原因になった直属の上司。

あとその上にいる上司。

共にまだ30代でしかない。

パート先の同僚は50〜60代の人ほとんどで、積み重ねた人生の影響からか、自分というものを頑固に貫いている人が多い。というか全員そう。

そのせいか小さなルール違反やズルも少なからずやる。納得いかないことは無視して、小さなことは忘れるか知らないフリをしている。僕が自殺未遂した原因も、そんな小さな失敗を、厳しい顔と口調で指摘されたからだ。まあ、僕の心が弱かったんだから、恨んでも仕方ないけど。

問題は、その上司たちが同僚にルール違反やズルを指摘するとき、なぜか笑顔で穏やかな口調になるってことなんだよなあ…。

まあ確かに僕は職場に来てまだ日が浅いし、年下だし、ガミガミ言いたくなる気持ちは解らなくもないけどさ。

でも、なんだろう。

納得いかない。

なんで新米の若造には厳しくして、ベテランの年上さんには優しくするの？

鼻真、っていうか…。

もうすぐクリスマス…。

その1週間後にはお正月…。

僕は来年、どんな気持ちでクリスマスを過ごすのだろうか…。

再来年の正月を…僕は…迎えることができるのだろうか…。

なんだか本気で新人賞にパスする自信がなくなってきた。

本サイトに投稿した小説の評価やお気に入りが少ないのも事実だし（そんな中で嬉しい感想をくださった皆様ありがとうございました！）、これまでに何回も新人賞の一次選考で落ちているのも事実なんだ。

どうやら僕の書くものは世間の価値観と合わないらしい。

分かってはいるんだけど、志を曲げてまで世間に合わせたくないという変なプライドがそれを邪魔する。

死ぬこと自体は怖くない。むしろもう苦しんで生きなくていいというだけでホッとする。

けど、何も成し遂げないまま死ぬしかないことだけが、唯一の心残

りかな…。

せめて爪痕だけでも残してから死にたかった…。

僕は決して自分の理想を押し付けるつもりで物を書いたりしない。

僕が書くのは本当の事のみだ。

それは10歳でメディアの世界を志してからの譲れぬ一線だった。

この世は夢や理想だけでは渡っていけない。

そして才能か努力どちらかだけでも成功は成し得ない。

子供のときは夢を追うだけでもいいかもしれないが、成長し社会に接するようになったら、どんなに厳しくても真実を教えなければならぬ。

でないと、惨たらしい現実にごち当たった際、自力で乗り越えることができないから…。

厳しい現実を教えて、それでも夢を追うか否かは本人が決めるべきことだ。

夢を捨てて現実ばかり見ても、また辛い現実と直面しながらなお夢を見るのも、どちらも決して楽なことじゃないから。

だから僕は、甘い夢ばかりでなく辛い現実も書いていきたいと思う。

幾つもの可能性を選択肢として著し、その中から自分の進むべき道を、本気で考えて選んでもらいたい。

それが、僕の役目だと思っている。

僕が高校生のとき、自殺児童が急増した。

そのときになって僕は、急がなきゃいけないと悟ったんだ…。

当時『ゲームなんかですぐコンティニューできることから、生まれ変わることができると信じ、命を軽んじているのだろっ』という意見も出たが、僕はそうは思えない。

むしろ、死を魂の昇華と賛美し、英雄的死を立派なこととする社会の風潮が原因だと思う。

織田信長や坂本龍馬のように、志を高く持った人間が殺されたりすると後世まで英雄として語り継がれるのがその例だ。

人間は死んだそのときだけ正当化される。

生きているうちは誰にも関心を持たれていなかったのが、死ねば哀れむ人が現れる。

例えば虐めにあっている児童が『僕は虐められているんです！ 苦しいんです！ 助けてください！』と訴えたところで、教師からはなんの助けもなかったでしょう。

そのとき、死にさえすれば全て終わらせて楽になる上に、自分のそ

の訴えが正当化されるんじゃないかと思いついたら…。

確かに自殺児童が増えてもおかしくないと思った。肉体的にも精神的にも、また社会的にも何の力もない彼等にとって、それだけが唯一の逃げ道だから。

でも、そんなことを子供に思わせてしまう今の世の中って…！

皆にとって真の理想郷とは、一体どういふ所なのだろうか。

人がみな道を弁えている一分の穢れもない世界？

少しの不具合くらい受け入れてもらえる余裕のある世界？

僕にはその理想郷に少しでも人が近づける可能性を指し示す義務があるから、是非とも知っておきたいところ。

でもさ…、

人には必ず一ヶ所は不備があるんだ。道を弁えることのできない人間は棄てられるのか、矯正されるのか…。だとしたら欠陥品な人間にとって、前者は理想郷とは程遠い牢獄かもしれない。

かといって多少の不備が許されるといふのも…。一生懸命頑張っている人間にとってみれば、自分より遥かにズルをした人間が許されているのを目の当たりにするのは、あまりにも屈辱的なことかもしれない。

結局、理想なんてものは自分たちの都合のいいように造り上げていくものなんだ。そんな利己的なものが満場一致なんてこと、あり得ない。

だからこそ、世界が目まぐるしく変わっても、全世界が平和になる
ことがなかったのかもしれない。

竜胆の花言葉は『悲しんでいるあなたを愛する』。

これをどのような意味でとらえるだろうか。

僕は今まで“君の悲しみを受け止めるよ”という意味でとらえていた。

自分だって辛いのに、目の前で悲しみを露にする人間なんか好きになれるはずがない。哀れんでほしいならどっかよそいけ、というのが本音だろう。

それを前提にして、君の悲しみも、苦しみも、丸ごと受け止めて、愛するから…そういう、いかにもデキた人間の心理を表した意味だと思っていた。

でも世間では必ずしもそうではないようだ。

悲しんでいるあなたを愛する…すなわち言葉どおり、あなたが苦悩している姿を見られてとても嬉しい、という意味でとらえる人もいる。

実際ネットで調べてみたら過半数がその意味でとらえており、人に贈るには避けた方が無難な花として紹介されている。

『悲しんでいるあなたを愛する』：こんな言葉でも、人によって捉え方は違うんだ。

正義や、忠孝や、礼儀や。そんな抽象的な言葉なら、きっとより一層バラバラな見解が出るに違いない。

そんな中で、こっちじゃない、そっちだ、と道を指し示したとき。

はたして人は間違えることなく正道を貫くことができるのだろうか
…？

書けない…。

なんだか、また応募原稿を否定されるのが怖い。

遠回しに『いくら推敲しても無駄なんだよ、だから諦めてさっさと死ね』と言われてるみたいで…。

努力しても、誠心誠意つとめても無駄なんだ。

否定されたとき、内実を知りもせず…と怒るのは簡単だけど、所詮評価なんてものは他人がするものだから。

内実なんて知らないし、興味ない。むしろなくていい。

自分の判断を大多数の人に認めてもらえれば、たとえ真実と違っていても正しいこととして認められる。彼等にとって、それが肝要なんだから。

敵は多ければ多いほどおもしろい。

勝海舟が言ったとされる言葉である。

資料に曰く、彼は生きている間はもちろん、死してなお自身への批判が絶えないことを見通してこう語ったらしい。

実際、天は人の上に人をつくらず人の下に人をつくらず、という名言を残した万札の顔・福沢諭吉でさえ彼を批判している（ネット調べ）。

逆を言えば、彼にはそれだけ人に与える影響があったということだ。世間の評判どおりの単なる外国かぶれのインテリ法螺吹き野郎だったら、心酔する者はもちろんここまで批判する人もいなかっただろう。

善きにしろ悪きにしろ、爪痕はしっかり残している。

そっという偉人が羨ましい。

僕は敵は多かったけど、影響を与えるだけの力は無かったから…。

死してなお悪く言われるどころか、生きている間あれだけ批判され

まくっていたのに、死んだら3日で存在ごと忘れられるだろうから。

僕は高校受験に失敗し、中堅どころの公立の第2志望校に進学することになった。

最初こそ世間並に大学進学を考えていたのだが、進路指導での言葉が僕のその決意を揺るがした。

「大学入試は落とすための試験だ」

「目標を高く持ちすぎるな」

高校受験に失敗して、努力なんかしても無意味なんだと不貞腐れていた僕は、頑張つて勉強するのがイヤになって、結局、学校幹旋での就職という道を選んだ。学校の成績さえ良ければ楽に内定するからだ。

それから僕の怠惰な高校生活が始まった。

授業中は居眠りするか落書きするかし、選択教科は得意科目だけを選んだ。それでも内申点は欲しかったから、とりあえずテストとノート提出だけは真面目に取り組んだ。

結果、僕は楽々と就職先が決まり、卒業時の成績は進学組を差し置いて学年3位を記録した。

ちなみに模試によると頑張れば駒澤大学くらい狙えるというレベルで、担任教諭も僕の成績を見て惜しそうにしていた。

それが無性に腹が立つ。

もし僕に高学歴を狙える力があつたのなら、始めからそんな進路指導はしなればよかったのだ。

僕の場合は元からその資格がなかったからいいけど、その素質があつたのに、原石のまま輝くことなく一生を送らなければならぬ道を選んでしまった生徒が、一体どれだけいたことか。

教育からして根本的に間違っているんだ、今の世の中は。

祭日に非番なんて久しぶりだ。

なんとなく気分が良かったので、今日は応募原稿の誤字脱字および不都合箇所の有無をチェックした。

特に問題は見当たらず、今度こそ第3者の目からチェックしてもらおうと思う。

でもやっぱり怖い…。

過去にあれだけケチヨンケチヨンに批判されまくっていたから、今回もまた同じことが起こらないとも限らない。

それがごく一般的な目線でのレビューならともかく、個人的感想で容赦なく批判されたら今度こそ僕の心が耐えられない。

それに…。

最近になって、あと1年くらいの命でしかないことを覚悟している自分に気付くのだ。

水嶋ヒロとポプラ社の件もあって、潜在意識の中で、僕はきつと予選をパスしないと決めつけてしまっている。

それが実力なら、諦めて死を受け入れるまでだけど…。

なんだか、人生の歯車は確実に死へと廻っている気がする。

ナンバーワンにならなくてもいい。もともと特別なオンリーワン。

それは本当だろうか。

いや、真か偽かでいえば間違いなく正論なんだろうけど、それがはたして万民の心を救うことができるのか、と問われたら疑問だ。

存在さえ認知されずに、枯れてしまう野の花もある。

花屋に並ぶ花にも売れ残りはある。

たとえオンリーワンの存在であっても、ナンバーワンとまではいかないが、多少は認められないと存在意義が無くなってしまいう気がする。

ましてや社会に爪痕を残したいと願うなら、何かしらの分野でナンバーワンにならなければならない。例えば僕みたいに新人賞にパスして出版化を狙うなら、絶対に1位の座は譲れない。

ナンバーワンにならなくてもいい。もともと特別なオンリーワン。

それはすでに社会に認められ、味方も多い人間の見解だ。

僕たちみたいに社会に認められていない、なんの力もない、それで

も世界を変えたいと志す人間からすれば。ただ己の無力を受け入れ、
オンリーワンに満足して留まっているわけにはいかないんだ。

僕は無知と無学が嫌いだった。

それは今でも変わっていない。

だから、今まで必死になって自分なりに、この世の中のことを…人間の心理から歴史まで…勉強してきたんだ。

…無知と無学な連中は、押し並べて差別と偏見に凝り固まっているものだから…。

…そしてこの世の中の物事すべてを、自分の物差しでしか計らず、それだけを絶対と信じてるから…。

だから、馬鹿とか言われるのが一番の屈辱だった。

僕を、自然科学が発展する前の、悪事悪意を悪霊や悪魔のせいにするような、他人にも自分にも無責任な連中と一緒にしないでくれ。そう思った。

そんな平気で人を傷つけるような人間に僕は…なりたくなかったから。

何故か日本の歌謡曲には“明日”に夢を託す詞が多数存在する。

明日があるぞ。

明日が（は）きっとある。

明日は来るよ君のために。

明日を諦めてはいけない。

… e t c .

否定はしない。

でも僕は、明日はきっと今日より良くなる、なんて希望を持たせたくない。

だって、今日を満足に生きられないのに、どうやって未来を楽しく生きるの？

僕みたいに未来に希望が持てない人間にとっては、明日なんて今日よりも悪い日なのかもしれないだ。

むしろ僕は、“今日”を満足に生きる方法を示したい。

そうすれば今はもちろん、未だ見えぬ“明日”も楽しく過ごせるだ
ろつと思えるから。

高校卒業時の話だが、文章修行を兼ねて、全くの個人的趣味として
壮大な中国王朝風ファンタジーを書いていたことがある。

そこで僕は漠然とした“君主論”みたいなものを築き上げ、それを
文章に記した。

以下はその略である。

.....。

政は君主ひとりでは成り立たぬ。

軍事、治水、法令、徴税…これらは全て臣下の仕事であり、王の仕
事ではない。ならば臣は有能なほど国は富むというもの。

しかし有能な者は突出しすぎる。

俗物とあまりにかけ離れているが故に周りに溶け込むことができず、
爪弾きにされる。

ならば君主にはその突出した部分ごと受け入れ、隠された能力を掬
い上げ、更には他者との縁を結ぶだけの力があるのかもしれない。

それこそが、王の仕事だ。

.....。

本当に有能な者を抱え込みたいと思うなら、まず自分がそれだけの深い懐を持たないと、ダメなのかもしれない。

それが、僕の“君主論”。

来年の今頃、僕は夢に破れ、潔く死ぬための準備をしているかもしれない。

仕事中、ガラスを磨きながら、僕は死ぬまでにしたいことは何なのかを考えてみた。

が。

…特に何も思い浮かばなかった。

考えてみたら人生のほとんどの時間を、世間を変えたい、あらゆる可能性や価値観を世の中に示したい、ということしか考えていなかったかもしれない。

それを決意する以前は死ぬことばかり考えていたから、望みといえは夢を叶えることしか念頭になかった。

金銭も名誉も愛情も、僕は本当の意味で欲してはいなかったんだ。

だから明日死ぬとして、何も望むことはなかった。

…そうだな。

強いていえば、死ぬまでに1度だけ、生きるために生きてみたい。

ずっと死と背中合わせに生きてきたから、最後くらいは生きたいと
思っ^て生きてみたいと思っ^つ。

小説を書くにあたって、台詞が一番困るところだと思つ。

特に女性がグツとくる言葉を考えるのは難しい（まあ自分の性格の問題もあるんだろうけど）。

例えば『貴女を絶対に護ります』と言いたい場合…。

「お前のことは…俺が命をかけても護り抜く！」

テッパンですね。

でもこのセリフ…よくよく掘り下げたら、単なる自己満足。

だって“俺”が敵に敗れて死んだら、その後“お前”は誰が守るの。

防波堤が決壊したら後は波に吞まれるしかないじゃん。フツーに考えて。

僕的にこの場合しっくりくるのは…、

「俺が生きているうちは、
に指一本触れさせない！」

こっちが正解だと思つ。

でもこの場合も、自分が死んだ以後のことを考えていない。

なら守るより先に護身術を身に付けさせた方がその人の為なんじゃ
…あ、でもそれじゃ姫さん願望のある女性はグツとこないな…。

うーん、ムズカシイ…（悩）。

だいぶ季節外れの話になりますが…。

1993年くらいに一発当てた、男性デュオの夏の日の某曲がありますよね（全然隠れてない…）。

知人によれば、あれは最低な歌らしい。

以下は知人解釈。

「長い付き合いだけど何とも思っていない女性の色っぽい姿を見て『いい体してんな』惚れちゃったよ』なんて、付き合い長いなら内面見てやれよ！ 失礼だよ！」

まあ確かに歌詞の内容はそうとれなくもないけど…ていうか、解釈はそれで正しいのか？ という基本的なツッコミは置いといて…。

知人、あんたの考えは甘過ぎるよ。

フツーは付き合い長くても、内面より外見を見るもんだよ？

例えばの話、仏頂面で『I love you』と言われるのと笑顔で『I hate you』と言われるのと、どっちが好感持てるか。…分かりきったことだろ？

人間にとって他人は“実”より“形”なんだよ。

じゃあ、あなたは生理的にムリな外見してる異性のイイ面を見て、好きになるなんてこと、あるの？

ほら、ないだろう。

12月に入ったにも関わらず、またしてもシエルター籠りの日々が始まった。

通勤の電車内で、職場で、また家に帰ってきてても。大声での無神経な会話が僕の神経を逆撫でするのだ。

自分ではそれほどでも、と思っていたのだが、かなりストレスが溜まっていたらしく、ベッドに倒れ込むなり緊張性頭痛に苛まれる日々。もちろん力チ割れそうな痛みに眠れやしない。

そして当然、執筆も全く進んでいない…。

部屋を暗くして、大音量で音楽をかけて雑音から遠ざかり、僕は頭の痛みに耐えつつ思った。

大丈夫。

あと1年の辛抱だ。

どっちの結果に転ぶにせよ、それで全て終わるのだから。

ここだけの話、僕は同僚（50～60代）に『ご苦労様』と言われるとカチンとくる。

『ご苦労様』は目上の方が下の者につかう言葉で、正確には『お疲れ様』が下の者から上の者あるいは同僚につかう言葉だからだ。

べつに敬語の使い方が間違つてるとか、礼儀にかなってないからカチンとくるわけじゃない。礼儀の問題だけでいえば、年上である彼等が年下の僕を“下の者”扱いしても不都合はないから。

僕がカチンとくるのは、その使い分けを知らないで、僕の倍以上の年月を過ごしてきているということだ。

現に、知っていれば年下とはいえ、あくまで同僚である僕にも『お疲れ様』と言うのが常識だろう。

彼等はきつと、その事を指摘しても知らぬ存ぜぬで貫き通す。そしてその主張は認められ、変わらず同僚に『ご苦労様』を言う。

彼等を知るべきことを知らずに生きてきた。それでも世間に認められ、当たり前前の幸福も手に入れた。

そう思うと、今まで世間に少しでも認められようと敬語から冠婚葬祭のマナーまで学んで、それでもなお世間並の生活さえままたらな

い僕の立場が、あまりにも馬鹿馬鹿しいものに思えてくる。

世間や自分と闘いながら必死で駆け抜けてきた僕の人生全てを、無意味だと片付けられている気がする。

朝から頭を中華鍋でガンガン殴られているような激痛が襲う…。

そういえば処方された睡眠薬も変な時間に飲んじゃって、結局寝たの日付かわって夜中の1時半だし…。

で、起きたのは朝4時だし…。

ここんとこめつきり睡眠不足。とりあえず執筆は誤字チェックしかできてない…。

ドウシヨウ…。

話は変わって、今月のシフト、24日が休みになつて…。

心遣いはありがたいけど、ちょっと気をきかせすぎだな…。

だって僕…誰かと過ごす予定もどっかで遊ぶ予定もないし…。

やっぱり執筆…するしかない…よね…？

まだ前の職場で正社員をしていたときのこと。

工場だったそこではライン作業者の結び付きを強くしようと、ツキイチで昼休みの時間を割り、閑談？　だか雑談？　するのが義務付けられていた。

でも僕には無意味に思えたんだ…。

だって、結び付きが強くなるのは元から仲の良い人たち同士だけで、僕みたいな歳の離れた新人には一切興味を持ってはくれなかったから。

実際、仲間内だけで話が盛り上がっていて、話しかけようにも中に入るような隙間なんて無かったし…。

一回だけ、趣味は何？　というテーマで全員の話聞く機会があった。

先輩の皆様は当たり前のようにスポーツを挙げた。もちろん話は盛り上がる。

けれど僕の番が来たとき、特に得意なスポーツの無かった僕は返答に詰まった。

しばらく考えて無難に『音楽が好きです（そのときは言わなかったけど、主に日本歌謡が好き）』と答えたら、あっそう、とだけ返されて直ぐさま別の人に話を振られた…。

…そりゃ期待していた答えじゃなかったただろうけど…そこまで露骨にシカトすることないじゃん…。

…やっぱり、人間ってみんなそうなんだ。

自分の物差しで計れる範疇のモノにしか興味はない。

異物はとことん排除される。

自分の理解できないものなんて…知らないし、知りたくもない。興味なんて持たないんだ。

自己都合により1週間ほど連載を休んだことを（しかも予告もせず勝手に）、まずは深くお詫び申し上げます。

卑怯を承知で言い訳させていただきましたと、ストレスにより体調を崩してしまい、かといってオーバードーズして現実逃避するにも薬に頼る術すべがなく、

さらに本作に度々記している“シエルター”も家族の怒声の前では役に立たず、すっかり精神が疲弊してしまったのです。

ですが、なんとか大丈夫です。生きてます。

僕にはまだやるべきことがある。

天が僕を見放すまで、僕は死ぬつもりはありません。

またしばらく、僕の超個人的な大ボラに付き合っただけなら幸いです（笑）。

あるタレントが雑誌で語っていたことである。

漫画『ベルサイユのばら』を読んでいた時期に学校でフランス革命を習い、分からなかった問題の解答欄に登場人物の“ポリニヤック伯夫人”を書いたら、見事に大バツを食らったというのだ。

大きな×マークというところから察するに、採点した教師からすれば『漫画のキャラクターを解答用紙に書くなんて大バカだ。漫画ばかり読んでいる暇があれば勉強しろ』といった心境だっただろう。

しかし言わせてもらいたい。

ポリニヤック伯夫人はれっきとした歴史上の人物である（というのが有力である）。

マリー・アントワネットに付け入ったことも、革命の際に自身の立場が危うくなると真っ先にトンスラしたというのも、資料によれば史実ということになっている（ネット・テレビその他メディア調べ）。

このことから歴史上における真偽はともかく、作者は決して想像して適当に書いたのではなく、勉強に勉強を重ねて書いたことがわかるはずだ。

それを、自分の勉強不足・知識不足を棚に上げ、自分が知らないからと勝手にそれを想像のキャラクターと判断するのは教師として恥すべきことである（特大×マークを付けた時点で知らなかったことは明白。知っていたらむしろ、教科書に則って教えていないはずの歴史上の人物を生徒が知っていることに驚くはずだ）。

無知や無学を否定はしない。教師といえども人間だ。知らないことだっただけである。

しかしこの場合は己の無学を棚上げして、他者が調べ上げた史実を勝手にフィクションだと片付けたことが問題なのだ。

疑問に思えば少なくとも調べる。それすらせずに勝手な判断で生徒を馬鹿だと評価したことが問題なのだ。

長い…長い夢を見ていたようだ。

死を覚悟しているとかなんとか言いながら、実は頭の隅っこで、もしかしたら賭けに勝つのではないかと、ほんのわずかに期待していた。

けどもう、その段階は過ぎた。

本サイトの人気作品のポイント数を見て、自分の作品がいかに評価されるべくもないものなのかを知った。何をどれだけ書いても無意味なのだ。

ならばきつと、文学賞応募作が予選をパスするはずもない…。

もはや賭けに敗れての死は単なる未来予想ではなく、目の逸らしようもない現実となっていたのだ。

怖くはない。しかし、心残りはある。

僕は人間として生まれながら、何一つそれらしいことをしていない。

世間に爪痕を残すどころか、社会に貢献することも、自分の人生に意味を見出だすこともできなかつた。

命を生み、育て、次世代に繋ぐという、人間なら本来誰でもできるはずのことさえ不可能で。

貧困に喘ぎ幼くして死ぬ命も、命の尊さを世の中に残して役目を全うするというのに。僕はといえばただ意味もなく死ぬためだけに生きてきた。

だったら僕は…何のために生まれてきたんだ？

天は何のために、僕のような出来損ないの不良品を生み出したんだ
！！

国のため、とはそもそもどういう意味なんだろう。

よく民意が第一などというが、その民意の何を優先すればいいのか分からない。

例えば幕末に例えるとする（今さら幕末に例えるのもどうかと思うが、たぶんこの時代が一番分かりやすい）。

同じ攘夷を掲げていても、倒幕と佐幕に別れていた。幕臣の間でもそれに対して恭順する考えと抗戦する考えがあった。

これらは両方とも民意なんだ。この両者が同じ道を自然に歩むことなど、まずあり得ない。

互いが我を張っている間は、間違いなく戦火は免れない。

そのどちらか…現代の風潮に合わせて考えれば、多数派かな…？の意見を尊重して、はたしてそれが真の意味で民のためになるのだろうか。

国の未来を憂いて、国と万の民を守るために、町ひとつと百の民を火の海に沈める。それこそが民意だったのだろうか。

∴ 分からない。

考えれば考えるほど、何が最善の策なのかが見えてこない。

ポプラ社から話題の某作品が出版された。

Amazonのレビューではかなりの酷評だったが、売り上げは史上稀に見ない値を弾き出し、実際に読んだ人の中にも『とても良かった』と評している者もいる。

…なんだか、ますます死の匂いが強まった。

妬み、といえはそうなのかもしれない。自分にはない才能を發揮し成功をおさめた彼に対する、妬み、嫉み、僻み、恨み。

それでも、やっぱりやり方が納得いかない。

純粹に書きたかっただけなのなら、どうして文学賞に応募なんかしたの？

芸能人がよくするような、普通に芸名で出版しました、という方法じゃダメだったの？ もしくは自費出版という方法じゃダメだったの？

こんな、ある意味タブーともいえる宣伝方法で成功して…これじゃ地道に文壇を目指してる人間が可哀想すぎる。

いまや出版社への持ち込みさえ見込めない（普通、読まれることな

くゴミ箱行きになるようだ)、そんな状況下で素人が認められる場は、もう文学賞や新人賞の応募でしかないのに。

出版社も社員を養うため、この読書離れに対して策を立て何がなんでも売らなければならぬ。そんな中でこんな手段が許されるなら、他が同じ手で大賞を決めないとに限らない。

そうならば、僕たちの唯一の文壇への道は潰えたことになる…。

そして…来年…、

ここまで極端ではないにせよ、最後の賭けに出た僕に同じことが降りかからないとは言えない。

負け戦は覚悟の上だ。

けど、僕はこんな負け方をして死にたくはない…！

明日は非番。

昼まで寝てる予定だけど、とりあえず本屋行って水嶋ヒ 執筆『K
AGER U』（全っ然隠れてないよ…）立ち読みするつもり。
売り切れてなければね。

買うのは癪だから、間違いなく立ち読み（爆）。

批判するなら読んでからじゃないと始まらない。

それに1000以上の秀作を蹴散らしておいて、あれだけケチヨン
ケチヨンに言われる作品がどんなものなのか、見てみたい。

良いところは参考にすればいいし、悪いところは避ければいい。

敵を欺くには、まず味方からだ。

あれ？ なんか違うな。

戦いの前には、まず敵をよく知ることだ。

そうだ、こつちだ（笑）。

非難ということで一気に気が緩んだのか、

体調を崩して一日中ベッドで横になるハメに…。

うう…今日は（全部の意味で、ある意味）話題作を立ち読みに行く予定だったのに…。

そのあと投稿作を推敲する予定だったのに…。

こうしてケータイで執筆するのが精一杯…。

…この頃、眠りも浅かったからなあ。

日付が変わらないと寝付けないう上に、夜中に何度も目が覚める始末。

おまけに朝は4時半起き。休日だってもっと寝ていたいのに朝早くに目が覚めてしまう。

自分ではそれほど、と思っていたけど、意外と心身ともにガタがきているみたい…。

考えてみれば、2回もオーバードーズしてる上に解毒もしてない（本当はもっとやってるんだけど、気を失った回だけカウントする）。本当ならどっちかで死んでいてもおかしくなかったんだよね。

でも、幸か不幸か僕はまだ生かされている。

その真意は…？

まあ、細かいことはどうでもいいのか。

ギリギリまで粘ってみよう。

もう、ダメだ。

僕はもう、この腐りきった世界にはいられない。

分かっていたはずだった。

この世が才能や、ましてや努力だけで渡っていけるほど、生易しいところではないことなんて。

すべては時の運が左右することです。

世間に愛されているか否かで、運命なんて簡単に決まってしまうことなんて…。

でも！ 僕が…いや、僕みたいな人間が生きていくには、あまりにも不都合な事ばかりが認められて…。

実際に時の運と世間からの愛情だけで、社会的に成功している人間を幾人も見てきてしまったら…！

僕にはもう、この世に生きる意味なんてない。…いや、違うかも。

もともとそんな資格なんてなかったんだ。

『自分が理解できない話は、相手が感情的になっているせいだと思っ
てしまうんだ』

どこかで、何かでこんな文章を読んだ気がする。

でも、思い出せない。思い出そうとすると頭が痛くなる。

それでも今日一日、この文章が頭からこびりついて離れなかった。

今まで思い出す必要が無かったことは、特に重要視していたわけでも、
気に留めていたわけでもなかったはずなのに。

馬鹿じゃん、僕。普通、逆だよ。

これはきつと、未来の僕への警鐘。

どんなに順序だてて、論理的に真実を説いても。可能性を展開しても。

理解されなければ、僕が感情的になっているせいだと思われてしまう。
馬鹿が大法螺を吹いているに過ぎないと片付けられてしまう。

それじゃ意味ないんだよ。

僕が今まで積み重ねてきたものが全てが無駄になってしまふ。

僕がこうして生きていくために犠牲になったものが全てが無意味になっ
てしまふ。

それじゃ一人で死ぬのが怖いからと、誰かを道連れにする迷惑な自
殺志願者と変わらない。

死ぬなら僕ひとりで死にたいんだ。

その覚悟は、10年以上前からできている。

…頭痛い…。

…目眩がする…。

…身体がダルい…。

…吐きそう…。

もう3日も前からこんな感じだ…。

熱がないだけに仕事も休めない…なのに食欲も無くて食べた先から戻しちゃう…。

半日だけとはいえ重労働なのに…エネルギー、必要不可欠なのに…。

こうなっちゃった原因は自分でも分かってるけど、詳しく書いたら悪口になっちゃうから一言だけ…。

僕の弱い心がまた悲鳴をあげたんだ…それも大きく…。

ああでも、嬉しいこともあったから、ちょっとだけ気分が浮上したかな…。

半年くらい前に書き上げた作品に、お気に入り登録してくれた人が

いた…（涙）。

読んでくれてありがとう。多分いや絶対これ読んでないだろうけど
ありがとう。そして本作を読んでくれてる皆様もありがとうござい
ます。

読者様は神様ですね。

自分ではもうコントロールの効かなくなった心を、何気ない顔で救
い出してくれる。

救いの神様なんて都合のいい存在、最初から信じてなかったけど。
でも今更になってやっと信じられる気がするな。

僕ってつくづく単純…単細胞…（笑）。

父がセカンドライフ（？）にヘルパーの仕事を目指しているため、専門学校の先生に薦められたというマンガ本をBOOK・OFFで買ってきた。

誰に薦められた訳じゃないけれど、なんとなく気になって本棚から失敬した。

内容は小難しくよく解らなかつたが、その本は確かに胸を打たれるものがあつた。気づいたら何回も何回も読み返していた。

…正直、驚いた。10代で生きることになってしまった僕が、今更…今更、漫画の単行本ごときに心を動かされるなんて。

『幸せつてのはね、自分の人生を他人に売り渡さないこと』

…そうだ。

命の大切さを、とか言うけれど。30年も生きていない嘴の黄色い若者に、そんなもの、真に理解できていたはずがない。…それは、僕にもいえるけど。

ビジネス最優先の出版社にも、メディアに踊らされた読者にも、きっとそれは解らない。理解できていない。

文章のアレコレとか表面的なことに気をとられることなんてなかった。出来レースとか利益第一主義の社会に絶望すること、なかったんだ。

真つ当に自分の信じた道を行く…これだけは僕にも自信がある。変な劣等感に苛まれる必要なんてどこにもないんだ。

もう逃げない。

僕は闘う。

あと1年、最期の最後まで闘い抜いてやる！

なんだか僕はいつもいつも、相手の都合のいいように存在を始末されてる気がする。

いや、都合がいいというか…。

「昨日、休んだ人ー」

上司が注意事項の再連絡のため、昨日非番だった人間を確認する。僕も手を挙げた。

「えーと、2人か」

…2人？

手を挙げているのはWさんとMさん、そして僕の3人だ。

が、視線は明らかにWさんとMさんだけをとらえている。

その後、昨日指摘されたという注意事項を細々と述べられ、僕は“昨日話したのに全く覚えてない人”と一緒にされてしまった。

ここまではいい。死角にいた僕のことなんて、咄嗟に確認できなかったんだろうから。

「えーとそれから…トイレ掃除する人、ちゃんとコレ（道具）使ってる？」

僕は正直に頷き、隣のOさんは『Aさん（別の上司）に注意されるまでは使ってなかった』と告げる。どうやらこれに関しても忠告を受けたいらしい。

「昨日注意したと思いますが、ちゃんとコレ使うように」

そこで初めて上司と目があつた。

（え…？）

そう、明らかに上司は僕を“見た”んだ。

（なんで…？ さっきは見えなかったから、僕を無視したんじゃないの…？）

その後、鍵を返しに事務所ドアを開ける。僕には一瞥をくれてやつただけだが、後から入ってきた先輩には『お疲れさまです』と返した…。

…ああ、そうか。

この人は、僕が嫌いだったから、都合のいいように無視してたんだね…。

分かっていたんだ。

人は自分に都合のいい存在にしか興味はない。

だから幼少期からは誰にでも合わせられるように無理な綱渡りをし
て、それでも意味はないと悟ってからは、少しずつ自己主張するよ
うになった。

でも、どんなに従順に振る舞っても、どんなに己を表面に出しても。

何かを改善しようと手探りで努めても、人は僕を嫌う。

従兄弟、近所の子供たち、学校の先生、一部のクラスメイト、前の
会社の上司、並びに先輩、そして、今の勤め先の上司。

僕は…きつと、存在していること自体がいけなかったんだ。ここに
いてはいけなかった。

こんなこと、僕だって認めたくない。僕はどうだっていいけど、こ
んなこと言ったら両親や友達は悲しむだろうから。

だけど、他に理由なんて考えられないじゃないか…！

世間では…少なくとも日本では今日はお祭り騒ぎだったが、世間の常識など当てはまらない僕には無縁の話。

恋人と過ごすなんて事はもちろん、友達と遊ぶわけでもない。ツリ―を飾るでもなければケーキも食べない。

今日僕がしたことといえば、自立支援の更新のため役所に行き、後は明日投函する年賀状を書いてたくらいだ。

といっても長年年賀状をやり取りしている友達だけだから、5枚も書いてないんだけど。

(今年は喪中の奴もいたんだよな…)

そこまで思って、僕はデザインする手を止めた。

…今年は…。

『!』を で困りだだけの兎を書きながらハガキを見つめる。

(…じゃあ、来年は…?)

もし…もし、賭けに敗れることがあったら、これが最後の新年の挨拶になる。

来年の今頃、僕は自分の人生を終わらせる準備をしているか、あるいは、すでにもう…。

救世主の生まれたその日に、僕は死ぬのかもしれない。

自ら。

(…もし、賭けに敗れた、その時は…)

…年賀状ではなく、クリスマスカードにしよう。

最後まで僕とつるんでくれたことへの感謝とお詫びを記して。

そして、僕は…。

先日3日間ほど体調を崩して、実は人間は自分が思ってる以上に他人に無関心なのではないかと疑問に思った。

例えば漫画などで『なんか疲れてない?』『顔色悪いよ?』などと訊くシーンがあるが、これが実際にあると思ってるのなら、よほど恵まれた環境で生きてきたとしか言いようがない。

ここからは実体験をそのまま書かせてもらう。

僕は前の会社で正社員として働き始めた頃、激務と厳しい指導とプレッシャーから、ほとんど何も食えることが出来なくなった。

空腹でも固形物は体が受け付けなくて。それでも家族の前でだけは心配かけまいと少ないながらもムリヤリ詰め込んだが、好物を食べているはずなのに味なんて分からなかった。

会社では僕が昼食をとっていないことはすぐに噂として広まった。けれども周りはダイエットだろうと決めつけていたらしい。

そんな生活を1年ほど続けていたから、その間に僕の体重は25kgほど落ちていた。

だけど、その時点で僕の体の変調に気付いた人はいなかった。自分の心身に無関心だった僕が悪いのだけけれど。

自分を含め、初めて異常に気付いたのは、破裂するような胸の痛みから…実際は胸骨の神経痛だったけど…倒れてしまったとき。

周りに病院に行くように言われて、そこで今までの拒食やら胸痛やらの原因が、重度の心身症からくるものだと判明した。

もちろん、仕事はドクターストップ。その間にリーマンショックが起こって勤め先も大々的なリストラを行い、休職していた僕は病気を理由に体よく追い出され、今に至る。

ほら、これで人が本当に他人の顔色や疲れなんて、分かると思うの？

気にしなければいいとは分かってる。

分かっけていてもやっぱり傷付くんだ。

「終わった？ ごめんね」

今日も開店のアナウンスが流れて5分後に現れた、先輩のI氏。

(…謝るくらいなら早く来いよな…)

建物の各階左右にあるトイレを2人一組で掃除する、というシステムは時に不公平だ。

最上階にある1ヶ所のトイレだけは、最後に2人でやることになっている。

のだが、I氏のように遅い人と組んだ場合、否応なしに僕1人で開店までに全部やらなければならぬ。しかも2人でやる範囲を1人で抱え込むわけだから、倍速で綺麗にしなければならないのだ。

僕、時間内に5階分。I氏、時間オーバーで4階分。これで同じ評価をされるんだから泣けてくる。

さらに厄介なことに、上層部はベテランに甘い。

例えばトイレトーパーは三角に折るといふ規則があるのだが、従業員がトイレを使用した後を見られた場合、僕が紙を折り忘れたことになる。ちゃんと折ったといくら訴えても、証拠不十分で厳しく注意されたこともあった。

一方でI氏のようなベテランが故意に紙を折らなかった場合、なぜかそれには苦笑いしながら優しく注意するのだ（実話）。

これじゃ割に合わないよ…。

いくら働いても、頑張っても、無理しても、結局悪いのはいつも僕ひとり。

気にしなければいいとは分かってる。

分かっているもやっぱり傷付くんだ。

最近、自分が何を書きたいのかよく分からなくなってきた。

いや、モットーとしてはちゃんとあるんだけど。他人の命の重みを勝手に計ることは認めないが、命を賭けてやるべきことを遂行していく人間の誇りを否定したくないとか。それ以前に、理解してもらえればいいけどさ！

そうじゃなくて、もっとこう、表現的なものが…ね。

僕は軽いノリの文章が好きなので、本サイト投稿作には自然とそんなのばかり載せてきた。というか、ぺらっぺらに軽いものじゃないと手応えがないのだ。

だから四苦八苦して考えたものより、100%ノリで書いたものが意外と読者様のツボにハマったりする。複雑。

だからどこに力を入れ、どこに力を抜くか。その力加減がうまく行かないんだよね…。

ちなみに僕はこんな感じのノリが好き。

「今度から浮気しないでね?」「善処します」

そこは約束しろよ! とか思いつつ、なぜか微笑ましい。

セリフではこんな感じが…。

「金を遣うのは大好きですけど、金に遣われるのは御免です」（銀行マンにならないかと誘われて断るときのセリフ）

…こんなんで本当に僕の作品は理解されるのかな…。

僕は自他共に認める頑固者だけど、読者様に合わせると言われれば合わせるくらいの柔軟性は、持ってるつもり。

お札の顔になった人物の著書に、乱暴に解釈するとこんなニュアンスのものがあるらしい。

人類皆平等と言うが、実際はそうでもない。それはなぜか？ 日本人には学がないからだ。だからみんな、人間努力さえすればなんでもできるんだ！ どーせ俺なんかアタマ悪いよ…と嘆いているキミも、ベンキョーして賢くなって不平等な世界を覆してやろうぜっつっ！！

某有名大学の創始者にそんなこと言われたくはない…（涙）。

まあ、言わんとせんことは分かるよ。高偏差値組向けの学校つくって、頭のいい子どもどんどん増やそうっていう趣旨も理解できるよ。

でもさ。

所詮そんなの綺麗事。

自分が努力して賢くなっても、同じだけ努力した人間は同じくらい先に進む。

つまり、自分がいくら努力しても、自分より頭のいい努力家には追いつけない。差は広がることこそないけど、逆に縮まることもない。

ここに絶対の格差が生まれるんだ。

学ぼうが焦がれようが、生まれつきの才だけはどうしようもない。努力一本で渡っていけるほど、世の中は甘くないんだよ。

自分が努力してのしあがったからって、それが全てだと思ってデカイ面されたくないんだよね。

それにさ、

愚者がいなければ、賢者は光らないんだよ？

自分が努力してのしあがった裏には、同じだけ努力しても振り落とされて馬鹿者扱いされてる人間が沢山いること、分かって言ってるの？

ここだけの話、僕は小学生の頃『道德』の授業が大嫌いだった。

皆と捉え方が違うからだ。

小学生あがったときには僕、すでに変わり者。僕の意味不明な言動について来てくれる人間は限られていて、担任教諭にさえ『ついていけません』と匙を投げられたくらい。

そんな武勇伝はさておき。道德の授業は表向きこそ個人の意見を尊重するが、実際はテキスト通りの答えを出さないと変な目で見られて『それは違うでしょ!』という具合になる。

だから僕はいつも発言しなかった。あてられたときは皆の意見を参考にして適当に誤魔化していた。

そのせいか道德の成績だけはすこぶる悪い僕。

今になって思うのだが、そもそも『道德』に数字つけたら意味ないと思うんだよね。

考え方なんて人それぞれで、価値観なんて十人十色で。百も千もある見解にどうやって数字をつけていたのか、未だによく分からない。

マニュアル通りの思考なら優として、その反対なら劣とする？

だったらそれすでに『道徳』じゃないよね。

なんてひねくれたことも考えていたりする。

年末は来客数がハンパない。

覚悟はしていたけどまさかこれほどとは思わなかった…（汗）。

屋上の駐車場は開店の15分前くらいには開いていて、賢いお客様はいつもそこから入ってくる。駅に近いということもあってトイレを借りに来る人もいる。

とはいえ実際トイレにまで入ってくるのは、従業員を含め多くても5人くらいなのだが、今日は倍は入ったと思う。まだ掃除中なのにぶつちやけ僕、全力尽くしても間に合わない。綺麗にした先から汚されるから。それでも仕事に私情を持ち込むわけにもいかなくて、とりあえず開店前には一通り終わるよう頑張った。

なのにいつも遅れてくるI先輩、僕が死ぬ思いで掃除したところをまた掃除するんだもんなあ（涙）。せつかく僕ひとりで時間内に終わらせても、お陰で5分ほど遅くなる。意味ないじゃん。

遅くなったお詫びのつもりなんだろうけど、なんだか素直に喜べない。まるで遠回しに僕の頑張りを否定されてるみたいで。

分かってる。嫌なら嫌だと言えばいいってことくらい。

でもそれは出来ないんだ。

だって、間違ってるのは僕の方だから。

相手が全くの善意でやってる以上、それを否定したらただの我儘になる。間違ったことを盾にしたって、認めてくれる人は誰もいない。気にしなければいい、些細なことだって思えばいい。僕ひとりが我慢すれば丸くおさまるだけのこと。

分かっているもモヤモヤするんだ。

僕は一体…、

どうすれば？

なんだかんだで、もう大晦日。

文章修行のために色々多々投稿してもう1年。上達したかどうかは第三者目線じゃないと分からないけど、だいぶ慣れてはきたかな。

一年前。思えばノリで書いた『チャット（以下略）』が意外に好評で、リクエストに応えるまま10作ほど書いて連載モノになった。僕の新境地を開拓した瞬間。

一年前。短編を書きまくって全ジャンル制覇した。ほぼ同時期に『12話完結シリーズ』も開始した。本当は消したい作品もあるんだけど、頂いた感想や評価やブックマが勿体無くて消せずにいる状態。素直に嬉しいんだけどね！

そういえばこの1年で“逆お気に入りユーザ”様が急増したな。中には退会された方もいらっしやるから、トータルではかなりの数になるかも（現時点では10人（嬉））。

どれもこれも1年前には予想もつかなかったことばかり。未来って分からない。

来年はどんな年になるのかな？

もう少し…もう少しだけ、僕に夢を見させてほしい。未来に1つだ

け、希望を持っていきたい。

夫が僕を見捨てるまでは、生きていきたい。

今の願いは、それだけ。

年が明けても相変わらずの不眠症予備軍。

結局寝たのは深夜1時過ぎ。しかもリアルで嫌いな内容の夢見て寝汗びっしょりで目が覚めた。ちなみにそれは4時30分のこと。寝不足。

というわけで、明けましておめでとございます。

明けて早々、僕は頭痛に倒れました。あと昨日から引き摺ってる咳が悪化して、ゲフオゴホいいながら仕事してきましたよー…。

頭痛の方はまあ、鎮痛剤飲んで寝たらほぼ治ったんだけど、咳の方がちーっとも治らない。起きた瞬間にゲフオゴホ。まあ咳止め飲んであったかくして寝れば大丈夫だと思う。多分。

そんなこんなで、仕事から帰ってからずっと寝込んでたので本作が初書きです。もーちよつと早目に更新するはずだったのにな…。

初っぱなからこんなんで僕、2011年を無事に乗りきれんんじゃないか。途中で魔がささないといいなー。

とにかく、どちらにせよ本年は激動の年になりそうです…。

新人賞応募作は年末にほぼ完成し、ギリギリまで推敲すれば後は運を天に任せるのみ。

というわけで、3月の頭に本サイトで本格的にアクションを起こそうと思う。

明日をも知れぬ我が身、やることやってから散りたいしね。

つーことで今年の目標をば。

? 12話完結シリーズ全ジャンル制覇!

計算上は3月〜12月まで週3日で書けば終わる! はず!! とりあえず今の時点で暇を見つけてはストックしてます。ちなみに歴史物に挑戦中。

それはいいとして、ジャンルの1つ『その他』…? チャットシリーズはこれに分類してるけど、一体12話で何を書けばいいのかねえ…?

? 新連載開始!

『1+1 2』(2009/文学) 『不思議の国の有栖!?』(2010/ファンタジー) に次ぐ長編に挑みます!

今のところ決まってる事項は、一人称・女主人公・ある意味最強のヒロインが別世界に迷いこむ系、のお話といったところ。後は未定。

“別世界”なら異世界へGO！に限らず、タイムスリップでも、それこそ単なる旅行でも可だしね。

以上2つです。

さて、3月まで原稿ラストスパートだ〜。

三ヶ日だからか、そのわりには、なのか。とにかく今日の帰りの電車はいつもに比べて乗客数が少なかった。

職場からの帰宅時、駆け込み乗車とまではいかないが、ホームに降りた瞬間開いたドアに滑り込むようにして、ガラガラの座席のひとつに座る。

ホツと息をついて車窓を眺めようと前を向き…僕は凍りついた。

慌ててたといえ、その座席を選んだことに、すごく後悔した。

…前に座っているおばちゃん2人組の手には、なぜか蓋のあいた杏仁豆腐とスプーン…。

あろうことか、おばちゃん2人は甲高い声で喋りながら杏仁豆腐を口に運んでいたのだ。

(…車内での飲食はマナー違反だろ普通…)

いい歳した大人が堂々とマナー違反だ。見苦しい。

おばちゃん2人組、優先席でケータイを弄ってる兄ちゃんを見て『最近の若い子は…』としかめっ面。いやちよつと待て。アンタ等だつて似たようなもんじゃん!?

勤務中に色々あつてムシヤクシヤしていた僕は、居たたまれなくなつて別のシートに移動した。

どうやら正月とはいえ、僕に心の休息はないらしい…。

このごろ頓に思うのだが、やはりある程度の知識はないと、俗に言う“面白い”作品は書けないと思う。

例えば昔映像化された某わんこが主人公の小説があるが（まあ僕は基本こんなインテリジェンス丸出しの小説は好きじゃないんだけど）、その中の一文を拝借させてもらおう。

「こんなところにANBがあるなんて！」　なにその略！？　アナキズムとナショナルリズムとボルシェビズム？　それともアラビアナショナルバレー団？　あ、そっか。バカっぷりを発揮して考えればいいんだ。

で、「どうやら『穴場』の略らしい」というオチがつく。

まさにインテリ臭いことこの上ないが、この展開は見事だと思う。

世間ではDQNのように音をもじった略語がある。つまり、アナキズムなんちゃらか展開しなくても『ああ、穴場の略か』で充分読者の理解は得られるのである。

ところが“高尚な発想”を先に展開することによって、ANB＝穴場をシュールなギャグとして成立させたのだ。オマケに小難しい言葉を撒き散らすことにより、読者を知識人の仲間入りにした気分させる。うまいな。

ちなみに「アラビヤ」のくだりはオイルショック時の日本の風潮を照らし合わせていたいただきたい。

これくらいの小技を使わないと、読者の支持を得られないというのは、ちょっと寂しいかもしれない。

関係ないけど僕が同小説で、素直に面白く感じたのはこの場面である。

「ママ、ぼく生まれてはじめてだよ、こんなに腹いっぱい食べたのは」

「パパ、盗み喰いってスリルがあっっておいしいよね」

「ママ、またあの間抜け犬の餌をくすねようよ」

「パパ、こんどはいつくすねるの?」

以上、親猫に話しかけている子猫4匹のセリフでした…。

てか自分の子供になに教えてやがる親猫どももおおおおー!?

断っておきますがコレ原文のままです。マジで。

いつもなら仕事の後に3〜4時間の仮眠をとるのだが（どこが仮眠やねん！とエセ関西人風ツッコミ）、今日は寝不足にも関わらず全くと言っていいほど眠れなかった。

ので、来春投稿予定の連載を書いていた。

12話完結シリーズ新作はターニングポイントまで書き上がり、長編もなんとか1話だけ書いて今日は終了。関係ないけど僕はいつもケータイから執筆・投稿してるので、今日1日で2回ほどバッテリーが切れた。電池パックが…（汗）。

ちなみに昨日の夜は3時間しか寝ていない。仮眠生活が長く続いたせいか、夜にまとめて寝るといことができなくなっただみだ。

というわけで、まだ体調は崩れたままです（泣）。

年末から引きずってる咳が全然治らない…。

ぶっちゃけしんどい…。

えーっと、まずは昨日、執筆できなくてゴメンナサイでした。

I・m 総理でした（反省の色なし。そして気付いてるだろうけど定番だけど古すぎるけど、総理じゃなくてsorry!）。

理由としては、本作のタイトルからも分かるように、早くもこの世に失望して自殺を企…、

ということはないです。

簡単に言ってしまうえば、年末からの体調不良と2日間に渡る睡眠不足から爆睡してしましまして…、

気づけば、すでに丑三つ時！

同じ日付で2話書くのもな〜と思い、再び深い眠りに落ちていったのでした…。……………。

猛省!!

というわけで、本作はまだまだ続きます。

相変わらずのブログ以下日記&超個人的思想哲学&大法螺をぶちまけていきます。

決着がつくまで、僕は生き続けます。

心の中がねじれて、絡まって、だんご結びになりそう。

きついきついだんご結びになったら、

自分で、ほどけなくなんないかな。

…というのが、半年ほど前に発売された本(というより漫画)にあった文章だ。

ぶっちゃけ、上手いこと言うなと思った。

確かにきついきついだんご結びになったら、自分でほどくのは難しい。

たとえ他人の手を借りられても、よほど器用な人間でないとほどけない。

ほどく人間によっては時間もかかり、場合によってはほどくより優先すべきことがあって、絡まったまましばらく放置。

で、本人は思い出すが第三者はすっかり忘れてる。

一方でほどけない人は少しだけ手を貸したものの、最悪余計に絡ませといてからに『自分には無理、自分でどうにかして』とバイバイ。

これが単なる紐や糸だったら、最終的には切るといつ手もあるけど…？

『心の中がねじれて、絡まって、だんご結びに…』

最終的には、どうしたらいい？

来春より連載予定小説の主人公を、英才教育を受けた小学生にしよ
うかと考えてみた。

トリップものなので、必然的に自己紹介することになる。例えば「
職業は?」「学生です」。

小学生の受け答えか? とも思ったが、まあ英才教育ならお受験も
体験済みだし、問題ないだろう。

ここまで考えてハツとした。

「職業は?」「学生です」…。

いやいやいや、幼稚園児とかフツーに「学生です!」って言わなっ
たよね? 本番で。

そついや僕は学校幹旋で就職の進路選択したけど、学校でやった面
接の練習で訊かれたな。たしか。

「職業は何ですか?」って…。

…見りゃ分かるだろ!? だって本番でも制服着るんだぞ!?

これで「家事手伝いです」とか答えたら単なるコスプレだよ!?

絶対ないだろうけど！

もちろん本番では訊かれなかったけどさ。それやったら英語の教科書にある“*What's this?*” “*This is an apple.*”くらいに変だよな。「これなあに？」「リンゴだよ」「見りゃ分かるだろが。」

ということとは、主人公のこれまでの人生において「学生です」と答える機会はないし、教わってもいないはず…。

そんなくだらないこだわりで筆が遅くなる…（汗）。

こんなんで僕、本当にここで執筆してていいのかな…。

昨日に引き続き、日野五十鈴のくだらない妄想シリーズをお送り致します（いらねええええ！）。

題して、「もし幕末の攘夷論者が現代に来たら」！ 歴史カテによくある「現代人が幕末にタイムスリップ！」設定から拝借しました。とはいえ…。

えー、まず攘夷論者さんは我が目を疑うでしょうね。

文明や科学が発展したことを差し引いても、発狂すると思いますよ多分。

信号待ちでちよつと隣を見れば金髪or茶髪。

フツーに外来語が飛び交ってる。

むしろ看板とかは殆どアルファベット。

…どー見たって欧米に呑み込まれてるよね！？ そう思われても仕方ないよね！？

現に国連に貢いだ（他に適する表現が思い浮かばない…）額は加盟国第2位、なのに常任理事国にはなれない（敗戦国だから当たり前

だけどね)。おまけに半ば植民地化されたはずの清国…今の中国は常任理事国の五指に入ってる。

日本が列強の支配下に置かれて良いように扱われてる、とか言われても反論できないよね！

当時の開国論者だって、たぶんこんな未来は想定してない…。

外交でしか生き残る道はないとはいえ、日本はどこへ向かいたいのかな…なんて思ったりする。

今更ながら、僕は最近きらきらネームなる言葉を覚えた。ようやく語彙も豊富になってきたぞ。

さてこの難読な名前に関してだけど、べつに今流行りの大翔ヒロトやら結愛アやらは構わないと思う。その風潮の走りの時期に当たる僕から見れば、人のこと言えないし（笑）。

問題は間違っちゃった系の名前だよな。

太陽と書いて「ガイア」とか、空と書いて「アクア」とか。これ、無駄に知識のある子供に知られたら絶対バカにされるよ…。

あと驚いたのは光宙ヒカチユウ。

…一生背負っていくんだよねこの名前!?

同様に心愛ココアとか。名字が森永さんだったらウケるけど。

かくいう僕も、自分の作品のキャラクターには源氏名みたいな名前も多々ある。言い訳させてもらうなら女の子向けのラノベ風なんかだと、もっとこうキラキラした名前じゃないと読者に受けないんだよ（汗）。

だって剣と魔法のファンタジックな世界で「やっほー花子」とか

アリなんですか！？ いや、花子は花子で充分可愛く美しいとは思っけど！

とまあ、色々書き散らしましたが。

何が言いたいかといえば、僕っ子筆者（年齢、性別はご想像にお任せします）のペンネームが「日野五十鈴」ってのも変なのかな？ということですよ（涙）。

変える気はないけどね。

こんな話がある。

平社員である男（仮にAとする）は、まだ小学生の従兄弟に「世間はうまくいかないことばかりで苦しいんだぞ」と脅した。

それを聞いていたAの叔父、つまり小学生の父親は「この世は捨てたものじゃない。軽々しく脅したりしないでくれ」とAに注意した。

注意を受けたAは「世間が…世間が厳しいからいけないんだ…僕は社会でなんか生きたくない。山にこもって世捨て人になりたい」と涙したらしい。

実話かどうかは定かではないが、少なくとも日本の資本主義による各々の認識のズレを如実に著したエピソードだと僕は思う。

ここまで言い切るAも問題だとは思いますが、僕としては叔父の言うことを肯定する気には到底なれない。

と言うのもエピソードをそのまま鵜呑みにすれば、この叔父は会社の重役なのだ。

更に加えて、性格は自信家で頑固で成果主義。つまり数字を上げることにあの手この手を尽くして出世し、しかもその手段が決して汚いものではないと信じ込んでいる節がある。

面倒事は全て弱い者に押し付け、自分の考えを認められた上での昇給、昇進。これでは社会をそう捨てたものじゃないと思って当たり前。

努力も思想も認められていないAからすれば、その考えを受け入れられないのも当然なのだ。

とはいえAも極端すぎる。世捨て人になりたいのなら、なればいい。それでもまだ社会にいるということは、死ぬ気で己の境遇と戦っていないということだ。

ぬくぬくと己の不幸に浸り、その不幸の元凶を他者に押し付けたところで、誰も認めるはずがないのだから。

この件に関して、一体どちらが正しいのか、という論を展開する気はない。

ただ、少なくともこのエピソードに出てくる小学生は、どちらの道にも押し込められる可能性がある、とだけ定義させていただく。

明日から久々の連休（2日間）。

引き込もって応募作の推敲に念を入れよう。

ここでの新作もストックしたいしね。

えー、ここからは私事で大変恐縮なのですが…。

ここ最近、お気に入りユーザ登録が減少傾向にあります（泣）。

新たに登録してくださった方も勿論いらっしゃるのですが（ありがたいございます！）去年より登録されていた方が3名ほど姿を消しました。

ちよ、マジで悲しい…。ただ単に更新とかしてないからだと思じた
い。

3月にまた本格的に力を入れれば、少しは改善されるかな、なんて
甘い夢が頭を過ったりする。

敵は多ければ多いほど面白い、という言葉を嫌でも思い出す1日だったなあ。

執筆の都合による調べ物があったので、ネットであちこち飛び回ってた。

そしたらある人のブログにたどり着いて、そのコメント欄に並ぶ誹謗中傷…。

これが俗に言う“荒らし”ってヤツですか！？ ネット住人こえー！でもね、それにまんまとノせられる人もいたけど、後半のコメはほとんど慰めだった。

私はアナタのこと信じてるよ！ だから元気出して、って…。

だから、あらためて思ったんだ。

そうやって味方でいてくれる人がいなきゃ、敵を迎えることなんて出来やしないんだなって。

もし周りが敵ばかりだったら、十中八九誹謗中傷ばかりで応援なんて皆無だろう。

そんな状況で“敵は多ければ多いほど面白い”なんて、意気地がないと分かってるけど僕には思えない。ムリ。

きつとそんな状況に突き落とされて…もちろん味方なんて誰ひとりなくて…世を憐んだ人も沢山いるんだろっな。

本サイトに掲載されてる小説の感想欄を見ると、幾つか『これって
のパクリですよ』というコメが見られた。

試しにその にあたる作品のシナリオなりキャラ設定なりを調べ
てみると、なるほど、確かに類似点はある。相違点の方が遙かに多
いけど。

した・しないは兎も角パクリに見えるのが問題だという声もあるが、
これについては何とも言えない。

和歌の世界には“本歌取り”というものがあり、作曲の世界には“
2小節くらいなら被っても問題ない”という暗黙の了解がある、ら
しい。

これを認めるならある程度のパクリは認められるし、認めないなら
少しの類似点も許せないというわけだ。

要するに、人によって許容範囲が違っていること。

厄介なのは、それが利益云々とかではなく好き嫌いで左右されると
ころ。好きなら必死で庇い、嫌いなら必死で指摘する。

真実なんてどうでもいい。要は自分の立場が守られればいい。それ
を好きな（或いは嫌いな）感情が正論に基づくものならいい。後は

知らない。

そういった、自己満足を確立させようという魂胆が丸見えだよ。

もし各々が自儘に生きること、『自由』とするならば、

僕はそれが絶対的に正しいとは認めない。

細い一本道のご真ん中を、悠々と歩くのが当たり前で。

左右に避ける者が障害物に衝突しても、後ろに長蛇の列ができて、前を歩く者とぶつかりそうになっても。

自分は正しいと信じ込んで、それらを意に介さずやはり堂々と真ん中を歩く。

それだけでも迷惑に思う者は尽きないのに、もし同じ考えを持つ自儘な者同士が鉢合わせたら。

己が正しいと自負している以上、決して互いに譲ることはない。進むべき道を妨害したとして相手を邪魔に思い、排除しようと取っ組み合いになるのは必至。

当事者はもちろんのこと、その周りにも被害が出る。

得する者は、誰もいない。

どちらかが、或いはどちらもが譲り合えば、争いは回避できるのに

…。

自由意思によって他人の迷惑を省みない人間が蔓延るといふのなら、
僕は互いを傷付けることのない礼儀重視の世の中を選ぶよ。

しばらく平穩だったのに、また不眠症気味…。

夜は例によって3時間も寝られず、やはり中途覚醒やら早朝覚醒といった症状も見られる。いつもは長く寝ていた仮眠も、まさに“仮眠”と呼ぶに相応しい時間しか眠れなくなった。

もうこうなったらずっと起きていたいんだけど、身体のダルさには敵わない。

ヤバイな…。

なにもしていない時間に焦りが募る。

休むのが一番の薬かもしれないけど、今の僕には時間がない。

とりあえずケータイに文章をメモしたりストックしてあるから、まだ大丈夫。…だと信じたい。

幸いにしてまだ執筆意欲自体はあるみたいだ。

やれることはやっておこう。

大学生の就職内定率もかなり下がったみたいだ。予想はしてたけど、このご時世だから友達も忙しいだろうと思って距離を置いてきたけど、やっぱり半年近く会ってないとちよつと寂しい。

現にメールの送信BOXは、11月に送った会社の安否報告訓練のが最新。受信BOXは週2で送られてくるメルマガで一杯なのに（涙）。

もともと僕は友達が出来にくい。むしろできない。

18歳で社会に出てからこの歳まで、新しい友達ができた例がない。学生の頃からついてきてくれる人間がいること自体が奇跡だと思う。今日この頃。

ライフステージの変わり目に、人並みのことはやってみてこの結果なんだから、仕方ないけど。

誰が悪いんじゃない。結局は他人に好かれない僕に問題があるだけ。でも、このまま増えることなく1人ずつ欠けていくのを見ているのは…。

嫌だ。

何もできないまま、何も持っていないまま、家族も友達もない人生をダラダラと送るなんて。

でも、何かアクションを起こさなければ必ずそうなる。なのに僕の人生の方程式によれば、努力しても運が悪かったら何も解決しないのだ。

頑張って努力して生きてみたところで、待ち受ける未来がそれ？

それなら、いつそのこと…。

『書籍化したら絶対に買います!』

こういう類いの感想を見て、心がキリキリ痛むのは僕だけなのだろうか。

単なる嫉妬でしかないのは分かっている。

悔しいならそれをバネに精進すればいい。

理解していてもやっぱり苦しいんだ。

これまでもこれからも選ばれることのない惨めさも、

大多数の人が出来ることを成し遂げられない劣等感も、

今まで生きてきたなかで、充分すぎるほど骨身に染みているから。

頑張ればうまくいくなんで、そんな都合のいいことが起こるはずないってことくらい、分かっているから。

ただ、苦しい。

苦しい。

助けなんて期待してないけど、自分を救う手段が見付からないのが
憤ろしい。

努力しても、ダメなんだ。

運が悪ければ、それまでなんだ。

天が僕を見放せば、どんなに足掻いても意味がない。

苦しい。

苦しい。

何かしなければならぬのに、何もできない自分が苦しいんだ。

一概に全部がそうとは言わないが、ティーンズ向けのラノベファンタジーを読むと、著者や編集者は何を訴え何をどう導きたいのかわからなくなってくる。

某評論家曰く、この手の出版物は「読者に感情移入させること」を前提に書かれていることが多いらしい。だからといってはなんだか、どれもこれも主人公に甘すぎるのだ。

主人公の側を絶対的な正義・正論とし、それと対極するものは容赦なく始末される。たとえ敵が主人公の生き方に沿うものだったら如何な犯罪者だとしても生かして、味方でも主人公の生き方に傷を付ける者ならプチ裏切りひとつで易々と首が飛ぶ。

傷は隠して見ぬフリをし、傷を付けるモノは排除する。それがさも当たり前のように展開していくのだ。

どうして、間違っているのは自分なのではないかと思わせない？

人間は完璧ではない。過ちの1つくらい、生きていれば必ず犯す。もしかしくなくても人生という物語で“排除されるキャラクター”は、他ならぬ自分なのかもしれないのだ。

それを自覚すれば更正する機会こそあるが、自分が正しいのだと信じているうちはどうしようもない。

夢を見ていたいというなら止めないよ。

でも、正しいのだと信じていた自分がいざ排除される場面に出くわしたとき、

それを受け入れて、認められる？

僕はそこにはいけない人間なんだと、本当は最初から分かってたんだ…。

潰しにかかる人はいても、拾ってくれる人はいない。ちょっとしたミスで揚げ足をとられ、正論はことごとく無視される。他人が笑って許されることを、僕が許されることもない。

会社なんてどこも同じだと思ってたから、仕事を選ぶ、なんて考えは僕にはなかった。実際その通りだし。

仕事内容の向き不向き以前に、僕はこの小社会に溶け込むことができない。

それが分かっているけど、逃げ出すなんて選択肢は僕には無かった。

…学校幹旋での就職だったから。

学校を通して就職した以上、逃げ出したら後輩の雇用に響くのは確実だった。勤めはじめてすぐに辞めてしまふ社員など、必要ないのだから。僕が辞めたりしたら母校の生徒全員がそうだという目で見られる。

後のことより先のことの方が自分には大事、って思えたら良かったのね。

その結果心を病んで解雇されたわけだから、本末転倒だけど。あの
人たちがきつと僕の苦労わかってない…。

目の下にクッキリ残る、青黒いクマ。

仕事疲れと対人ストレスと睡眠不足は、自分が思ってたより深刻化していたみたいだ。あと体調の変化といえば、去年に治ったはずの椎間板ヘルニアが再発したくらい。左足が痛いぜ畜生。

そんな身体に鞭打って、明日も例によって仕事です。3時間だけの労働とはいえ、早朝から休憩なしでのお掃除はそれなりにキツイのですよ。心身症ってだけで体力も消耗するしね。

べつに目の下にクマできるだけならいいけどさ…苦勞が報われないってのも、それなりに辛いものがあるよね。

一生懸命やらないと“ちゃんとやった”って認められないし、足を拗められたら全否定されるんだもん。何がって、全部が。

慣れはしたけど、辛くないって言ったら嘘になる。それでも受け入れなきゃいけないんだよね。それが“当たり前”なら。

若いうちの苦勞は買ってでもしろとは言っけど、買うゆとりのない人もいるんじゃないかな。

無理したら、借金になっちゃうよ。心の。

…って上2段はある本の受け売りなんだけど（笑）。

心の借金苦…か。

まさにそんな感じだな。

返済できる日が、

来るのかな？

いつものことながら、今日も集合場所に遅れてやってきたI氏。

当然タイムリミットは過ぎ、2人でクリアするべき最終ポイントは僕ひとりで時間内に終わらせておいた。なんか作業みたいな表現になっちゃったけど。

で、I氏はニコニコしながら僕にこう言いました。

「いつも遅れるから先に事務所に帰ってていいよ？」

.....。

ふざける。

遅れてくるから、ってそれ、時間内に来るつもりサラサラないよね？

帰ってていいよ、ってそれ、明らかに共同作業の最終ポイント僕ひとりに押し付けてるよね？

アンタ人に仕事押し付けるのを、自分のお優しい気遣いに包んで正当化しようとするなよなっ！っ！

申し訳なく思ってるなら早く来て手伝えるように努力しろよ。それが無理なら「私にはこの仕事むいてません」って上司に異動の相談

でもしろよ。実際アンタ以外の相棒は時間内に来て役割きちんと
なしてるんだよ。

これだから人間は嫌いなんだ。

自分の無能を正当化して、改善する努力もしないで、ぬくぬくとそ
れに甘えてるんだから。

…最後に助かる奴と、最後に潰される奴って、一体なにが違うのさ？

天は無情な決断を下したとかよく言うけど、一部分を除いてはそうとも言えない気がする。

苦しい状況にいる誰かを助けるのならば、それ以上か、少なくとも同じくらい苦しい人は皆助けられるべきなんだ。

でもそれは、絶対にあり得ない。

だって、人間誰しもが自分が一番苦しく、自分こそ真っ先に助けられるべき存在なんだと思っっているから。

隣の誰かを助ければ、救われなかった自分は天を恨み相手を憎む。けれど無尽蔵に救済などできやしない。だから本当に情けをかけたと思うなら、誰も助けなければいい。

そうすれば、不公平はなくなる。

それを言ったら酷だって？

まー目の前で苦しむ自分のお気に入りを手助けしたいって気持ちは、分からなくもないけどさ。

でもそいつの隣で同様に苦しんでる奴を突き放しておいて、正義だ
道だなんて偉そうなこと言ってほしくないんだよね。

自分はそんな力すら持ってないくせに。

正義のために死んでくれと言われて、大人しく殺されてもいいと思える？

僕なら無理だな。

死んでくれ、と言ってきた人が、僕とは正反対の道を歩んでいるのなら。

僕の正義と相手の正義が食い違っていたら、相手の正義が僕の悪なら、やっぱり死ぬに死ねないよ。

何が言いたいかって？

つまり勧善懲悪って定義は、正義によって殺される人には通用しないし、とんでもない言い訳にしか受け止められないってこと。

“こんなヤツ死んで当たり前”の“こんなヤツ”になりたくないなら、必然的な殺され役を作るってこと。

だって、みいんな「自分こそ一番正しいんだ」って思ってるんだからね。

誰だってそんな利己的で自己中な理由で死にたくはないでしょ？

僕は小説を書くにあたって、1つだけこだわりがある。

決して「こっちが正しい」という主張を書かないこと。

正解なんて誰にも分からないだから。

僕が記すのは、可能性。

真っ直ぐに伸びる道しか見えていないのなら、脇道があることを示す立て札を置く。

時には陸路だけでなく、海路や空路も選択肢に入れる。

僕ができるのはそこまでで、肝心の進路を選ぶのは本人に任せたい。

正解なんてないのなら、せめて進んだ道に誇りを持ってほしいから。

一本しか道がなかったとか、誰かにムリヤリ押し込まれたとかだったら、障害物に行く手を阻まれたときに悔しいけど。

悩みに悩んで選んだ道なら、どんなに苦しくても、この先きつと、後悔しない。

…といいなあ(笑)。

僕はいつも仕事（清掃）を開店前に終わらせるよう心掛けていた。というか、終わらせないと上司や巡回担当者から「サボってる」と見なされるのだ。

かといって適当にやったら「サボってるだろ」と言われるし、完璧を目指したら明らかに時間オーバーになる。無理とは分かっているけど出来る限り両立できるように僕、頑張った。ガミガミ言われるのはやっぱり嫌だから。

そのせいか2人1組で行う担当場所では、シフトによって代わる相棒全員にそこそこ認められている。

けど、それが裏目に出た。

相棒のひとりにシフトを訊かれ翌日休みだと告げると、ロッカールームにいた同僚にこう溢したのだ。

「（僕の名前）は仕事が早いから、時間に遅れても“やってくれている”と思って安心できるんだけどな〜」

安心しないでくれ（汗）。

いや、頼りにされてるのは嬉しいよ？ でも上記の理由を毎日毎日リピートする身にもなっってくださいよ（泣）。しかも上記の理由っ

て上司にしてみれば“やって当然、できて当たり前”だから誉められることなんて無いんだよ？

せめてうわべだけでも協力できるよう努力してるフリして下さいお願いだから…。

僕だってたまには頼りにしたいし、甘えたいんだよ。

人間なもの（相　みつを風に）。

日野五十鈴、一生の不覚…！

休みだつっーのに思いつきり体調崩した…（涙）。

書き進めたくても起き上がる気力もないし、ケータイの画面見るだけで目眩がする…。

熱とか咳がないだけ余計に悪質だチクショー。

やっぱあれか？

夜遅くまで調べ物してたのがまずかったか？

それとも日頃の不摂生が祟ったか？？

明日からまた仕事だつてのによ…。

というわけで本日はこれで勘弁してください（汗）。

明日までに回復してない場合はお休みします…。

ではでは緊急（？）報告でした…ボタンツ！（エネルギー切れ）

恥ずかしながら（執筆に）帰って参りました。

なんとか体調の方も回復してきたので、また本作を更新させていただきます。今月末に終わらせるんですけどね…。

しかし身体は休めても、心は休めず。

迷うこともありました。

悩むこともありました。

それでもなんとか、生き延びています。

詳細は追々書いていきたいと思っておりますので、どうか僕の法螺にお付き合ひ頂けると幸いです。

某ブラックコピーのコピーみたいに、自分を信じすぎず疑いすぎず生きて書いていきます。

それがなかなか出来ないんだけどね。

書けない…。

来月連載予定の話を書いている途中なのだが…、

あれこれ調べているうちに、何だか怖くなってきた。

ちなみに歴史物を執筆中。歴史とは名ばかりのデタラメだけど。

こういうテーマは大抵、事実上の誰かをベースに書かなければならない。となると主人公側の人間を持ち上げ、それに敵対する人間を落とすことになる。

とりあえず主人公側、それに都合が悪い側の両方をフルボッコにする作風に書いているつもりだから、それに関しては問題ないとは思っけど…。

ちよつとばかりネットで某人物のデータを調べたら、その人を褒めあげる記事の多いこと多いこと！

しかも、史実に沿ってシナリオを組むとしたら、その人と主人公って対立するんだよね…。

怖い。

読者に文句言われるのは目に見えてる。だってどれだけその人を持ち上げて、主人公と敵対してる時点で悪役扱いしてるみたいに見えるじゃん。

その人を神と崇める読者からブーイング来るよ絶対…。それについては誰を主役側に置いても同じだし。

己の正義感を絶対と確信してる人全員の期待には応えられないよ…。

何を書いてもそれは変わらないけど。

明日はバレンタインデーだというのに、相変わらず僕には無縁の話。というか、僕みたいな人間は人を好きになってもいいのかな？

自分が常識の範疇に（嫌な意味で）入らない人間だつて分かつてるし、巻き込んだら相手が苦勞するのも分かりきつてる。

僕の隣で誰かが苦しそうな顔をしてるのつて、あんまり見たくないんだよね…。

それと学生時代にありがちな、誰かと勝手にカップルにされることもあった。ちなみに社会人になってからもある。

その頃からクサつてた僕はクダラナイとか思つて放置してたけど、そのとき噂されてた相手の心底嫌そうな顔といたら！

嫌われる恥辱に耐えられないと言うより、その顔を見たくないから、僕は自分から人を好きになれない。

そういう人間は人に好かれないうこと分かつてる。それ故の孤独はとうの昔に受け入れた。

そんなものよりも、相手の心底迷惑そうな顔が、僕は、忘れられないんだ。

殉国するを良しとする考え方を、軍歌からとって“見事散ります国のため精神”と名付けてみた。センスないなお前と言いたければ言え。

いちいち名前をつけたのは、これからおそらく執筆に使っだろつと
いう予感と、どうやらその思想が若者の間で何だか広まってるっぽ
く見えたから。

戦火に巻き込まれる庶民の生活とかを舞台にすると、滑稽に描かれ
ることが多いのに、戦う側に置くと英雄視されたりするのはどうし
てだろう。

逆に主君を裏切るとそいつは作中でフルボッコにされる。たとえ裏
に民の明日の生活がかかっていたとしても。

やっぱり僕には善悪の区別がつかない。

どちらに身を置くべきかが分からない。

誰のためを思って、その上で戦うか否か。

諸事情があるにせよ結局のところ、人は自分の都合のいいようにそ
れを選ぶのかもしれない。

ただ…。

もし本当に戦時中と同じ、見事散ります国のためと口に出す人間が多数を占めたら。

またあの時代を繰り返すことに、なるのかな。

頑張れば今月中に『12話完結シリーズ』の新作が全部ストックできそう。内容の完成度は別として（最低）。

本当は応募作の推敲をラストスパートしたいんだけど、ヘルニアが治らないがためにパソコンの前に長時間座ってられないから困る。しょうがない、プリントして直すところ直接書き込んで、後でまとめて手直しするとするか。ちっ。

そんなこんなで、執筆やらデータ収集やらで睡眠時間も夜3時間・昼1時間くらいで固定されてきた。ぶっちゃけ眠い。だが気にしない。やることやらない後悔よりも、やった方の後悔のが軽いだろ。うしね多分。

もうゴールは目の前だ。…どっちに転ぶかは運次第だけ。

さすがに4日連続の6時間未満睡眠はきつかった（汗）。その分ストック溜まったからいいけどね！

つーことで明日は非番なんで、目覚ましかけないで寝ることにしよう。起きたら応募原稿プリントアウトして、紙に直接どう直すかとか書いて、痛み止が効いてるうちに直せるとこ直して、合間にこっちの作品を書いて…また日付変わってから寝るんだろうな。明後日からしばらくシフト入ってるのに…。

いつからこんなにカラダ弱くなったんだろ。前は風邪ひとつひかないし、1日くらいは完徹しても平気だったのに。それはたぶん、前の職場で心身ともに無茶してボロボロになってから。

長期間の放つたらかしを経て、執筆記録に重点を置いたら、見事に読者様が離れていったので、また超個人的大法螺思想を展開させてください…もしかしたらそれこそが読者離れの原因かもしれないけど…。

そんなわけで。

明日からまたしばらく仕事。寝起きに与えられるストレスサーは、精神障害者には効果絶大だ。

ストレスという言葉はもともと物理用語で、ゴムボールにかかる負荷を“ストレス”と呼ぶらしい。記憶違いだったらごめん。

で、ある本には『歪んだゴムボールが元通りの形に戻ろうとするように、いずれ時が経てば心の状態も安定してきます』とある。

間違っではない。事実、ある程度の負荷なら潰れまいとゴムボールも必死に抵抗するものだ。

ただ物理の世界にも心理の世界にも、ストレスに耐えきれなくなるというケースがある。これをゴムボールに例えるならば、潰れたまま戻らなくなるという状態らしい。

つまり健全な心理状態ならまだしも、潰れた場合時が経つ程度では

元に戻らないというわけだ。理屈上。

それを踏まえて『ストレスにも意味がある』と言い切るのは…。

ちょっと僕には出来ないかな…。

…このくらいの展開でいい？

自分の考えと相反する展開の筋書きを見たとき、

どこでもいいから逃げ出したくなった。

それはきつと、生きてることから。

自分が徹底的に認められていない空しさから。

悪者にされ、それが覆されることはないだろうという予感から。

戦い続けるには、もうクタクタで、

支えてくれる誰かの腕も、僕にはない。

いつそのこと、全てを無かったことにしてしまえれば。

幸せな奴も不幸な奴も、僕は知らない。興味ない。

なにがどうのさばろうが、僕には関係ない。

そう思えたら楽だったのに。

善悪の区別がつけられないことは、悪いこと？

何が正しく何が間違ってるかなんて、時と場合によって変わるんだ。

殺人犯を裁くためにくだされた死刑判決。

飢えた万の人間を救うためのクーデター！。

何が正しく何が間違ってるかなんて、自分の置かれた立場によっても変わるんだ。

悪に染まらないための諸規制。

悪を滅するための自由権主張。

何が正しく何が間違ってるかなんて、都合と価値観だけでも変わるんだ。

それとも…、

志半ばにして早死にすれば、無条件に美化される？

だったらね。

絶対的な“善”を勝ち取れるなら、この命、失うことなど怖くない。

誰かの言う「真実」なんて当てにならない。

数ある選択肢の中から自分に都合のいいものを選んで、都合の悪いものを無視して、自分の在り方を肯定しつつ広めていった「カタチ」に過ぎない。

何においても「絶対」なんてあり得ないのに。

それを棚にあげて「真実」をこり押しするような人間をよく目にするけど、

じゃあ君はそれの全てを知ってるの？

「くなら だと思つ。××ではない」

ほら肯定できるコトなんて99%しかないでしょう。

なのに否定するときは100%だ。

滑稽だね。

それを「可能性」ではなく「真実」と言い切るのなら。

たった1人だけでよかったんだ。僕の主張を受け止めてくれる人は別の道を指し示すこと。異なる考えもあると真に理解してもらおうこと。それを受け入れてもらうこと。

普通に生きられなかった僕の、それが、それだけが生きるための手段だった。

多くは望まない。望んでも無駄だから。

だから、今はただ目を逸らされると悲しい。

自分には必要がなくなったからと、急に見放されると死にたくなる。

じゃあ僕は、どうすればいい。

彼等は何を求めている。

揺るぎない真実？

救いの手？

己を肯定してくれるもの？

優しい嘘？

厳しい励まし？

分からない。

分からない。

分からない。

分かったのは、僕の存在意義が無くなったということ。

薬屋に向かうついでに、すぐ隣にある本屋にもよく足を運ぶようになった。

入ってすぐの平積みコーナーには大河関係の歴史物がズラリと並んでいて、通路を挟んだ反対側に「生き方」に関しての書物がその倍近くある。

みんな生に悩んでるんだな、そう思いながら数冊パラパラと読んでみた。

『…僕は相手が出来ると期待してたから無茶な要求をした。そして相手は要求した以上の成果をあげてきた。その人の能力を上げるには、時として相手を批判することも必要なのだ』

『…活性化の手段として“反対”する人がいるが、意見を遮ってばかりだと、この人の前では何も言えない、と萎縮する人も多いのではないだろうか。たまには譲ることも必要だ』

(…いやいやいや…)

結局どつちなんだよ!?

ちなみに相反する意見はこれだけではないと補足しておく。

1冊を鵜呑みにするならまだしも、トータルして模索したらより迷いそうだな…(汗)。

昨日に引き続き本屋さん編。

『自分を好きになる方法』とかよく目にするけど、その中身も種々雑多。

共通して言えるのは、何らかの方法を通して“好きな自分”を作り上げていくという展開。

自分を好きになる、と銘打っておきながら、『自分を好きになれない君のままでもいいんだよ』という意見が稀有なのが不思議だ。そのままの自分を好きになつてはダメなのか？

もっとも、そう思えばそんな本は手に取らないだろうけど。

自分の価値は自分で決めるもの。

簡単にはそう思えない世の中なんだが、今は。

近頃よく、というよりまた、心がざわつく。

誰かが近くにいると落ち着かなくなる。

独り言や呼吸の音さえ、耳障りで。

ただただ無性にその場から逃げ出したくなるんだ。

頼むからひとりにさせてくれ。

構わないで。

話しかけないで。

こっちを見ないで。

そっとしておいて。

救いにならない干渉なら要らない。

的外れな好意なんて迷惑以外の何物でもない。

そんなことを思うなんて、人間として狂ってるのは自覚している。

でも僕を狂わせる引き金となったのは、

他でもない、この狂った世界のシステムじゃないか。

物事は否定するのは難しいけど、肯定するのも難しいと思う。

というよりは、物事を否定しようと思えばできるし、肯定しようと思えばできると思うんだ。ただしないだけで。

子供が井戸に落ちたとき、人はどうする？

ある人はこれを「誰だつて助けるはず」と説き、またある人は「自分の命がかかっていれば、むしろ自ら我が子を落とす」と説いた。

どちらも間違つたことは言っていない。それでも意見は正反対なんだ。

どちらをとつても賛否両論。

いつの世に、多数派や権力者はどちらをとるか。

ただそれだけ。

2月も残すところあと2日。締め切りまであと1ヶ月に迫りました。
…なのに。

フロッピー故障。

なぜだか分かりませんが、応募原稿を保存していたフロッピーディスクがご臨終してしまいました…（泣）。

これはなんですか何のイジメですか僕はとうとう運に見放されたのでしょうかっっっ!?

本当は今月末に出したかったけど仕方ない。というか、コピーとってなかった自分が悪い。ので、2週間くらいかけてまた書き直します。せつかく何度も見直したのに…。

友達のくれたアドバイスメール、消さなくてホントに良かったよ。
これを参考にまた頑張ります。

友達のためにも負けたくはないのだけど…情で勝てるものなら、古今東西泣き寝入りする人なんていなかったんだよね…。

急がなくちゃいけないのに、体がついていってくれない。

指先にも力が入らないし、何より頭が回転しない。少しだけ休もう
と思って横になってもなかなか倦怠感が抜けてくれない。

…どうしよう…。

もう終わりにしろ、ということなのだろうか。

まだ何もできていないまま？

何かしたい。

でも長くはもたない。

時間がない。

急がなくちゃいけない。

なのに何もできない。

このループから抜け出せるのは、いつ？

あと10ヶ月後に、答えは出るのだけれど。

応募原稿の手直し必須部分を確認したくて、下読みのメールを何通か読み返した。

受信した酷評と、送信した弱音。

苦しくて苦しくて苦しくて苦しくて、最悪の逃げ方を選択した去年の9月。

生きていてもいいのかという問いに「死なれたら悲しい」の声。

…でもきつと、僕はその期待に応えることはない。

何度時間を巻き戻しても、世界を変えられない限り、僕はきつと同じ選択をする。

それでもきつと、悲しむ人のことを考えて死ぬな、と言う人もいるんだろつ。

間違ってるのは紛れもなく僕の方だ。ただと言うべきことが残ってる。

生きてほしい人がいるのなら、あんなやつ死んで当然なんだ、なんて言ってもんじゃない。

生きてほしい人が、死んで当然の人間になってほしくないのなら。

僕が人生を賭けて変えたいのは、そういう世界。

じゃないときつと、僕みたいな間違った人間がまた現れるから。

おわりに。

死の匂いを嗅いだあの日から、あらためて痛感させられたことがある。

僕は本当にこの世界にとって不穏分子だった。

擁立される悲劇に悪を見出だし、正論に辻褃の不一致を見付ける僕は、どうしても世界に反抗しているだけのようにはしか映らない。

見ている世界が違いすぎたんだ。

溶け込むことができないなら、それを説くしかないと思った。別の角度から見た風景を写し出すこと。それが不穏分子たる僕の唯一の生きる手段だった。

けれどそれも、誰の目にも留まらなければ意味がない。

受け入れられないということは、僕自身の存在を否定されたも同然だから。

そうならば、潔く身を引くより仕方ない。

だからこそ、世の中の「夢を信じたい人」に告ぐ。

自分の信じた一本道の行方に、不満ばかり抱かないでくれ。

あのとぎ別の道が見えていたら、なんて言わないでくれ。

それを指し示す立場にある僕たちを、無視してまでそれを選んだのだから。

了

結果報告。

予感があった。覚悟は決まった。

一年以上が過ぎて、その日、決定的となった。

僕は負けたのだ。

だから、潔く自分の手で幕引きを図った。

なのに、…運がいいのか悪いのか、また死にかけただけで生き延びてしまった。長く昏睡していて、目覚めたらベッドの上だった。

未遂で終わると厄介だ。その時に死ぬためのエネルギーを使い果たすから、回復するまで行動できない。だいいち周囲の警戒も厳しくなるから行動に移しにくい。

だったら何もかも忘れて生きればいいと分かっているのに、自分の人生は妥協したくないという思いは強く残っていて。

だからきつと、終わるその時まで僕はまた「背水の陣」を繰り返す。

それはいつ？ 次の賭けの時かもしれないし、何回も繰り返した後かもしれない。終わらせるにも、勝って望むものを手に入れられるのか、負けて何もかも失うのか、分からない。

本当は今も生きること疲れてる。動いていても疲れるけど、眠れないのなら休めば休むだけ疲れが溜まる。

そうしてゆっくり眠るために、また僕は賭けに出るんだろう。

繰り返すことはわかってるから、心配と迷惑をかけたことを謝れない。もう一度同じことをするなら、謝っても意味はないから。その代わり「ありがとう」を言わせてください。

ありがとう。とりあえず、今まで僕は生きてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8222n/>

死の匂いを嗅いだ日

2011年12月1日01時47分発行